●衆議院議員選擧法及同施行令ニ關スル事務及書式等取扱方

（明治三十四年十月七日 內務省訓令第十四號）　廳府縣

衆議院議員選擧法及同施行令ニ就テハ其ノ事務及書式等左ノ各條ニ準據シ取扱フヘシ

第一條　衆議院議員選擧法第三十二條ニ依リ選任シタル投票立會人其ノ職ヲ辭シタル場合ニ於テ選擧ノ期日ヨリ少クトモ三日前ニ之ヲ本人ニ通知スルコトヲ得ヘキ餘日ヲ存スルトキハ同條ニ依リ更ニ投票立會人ヲ選任スヘシ

第二條　市役所町村役場以外ニ投票所ヲ設クル場合ニ於テハ可成門戶アル場處ヲ指定スヘシ

第三條　投票用紙及封筒ヲ各投票所ニ配付スルトキハ投票所每ニ各其ノ數ヲ明記シ投票終了ノ後直ニ其ノ使用ノ數ヲ報告セシメ殘餘及汚損ノ投票用紙及封筒ハ同時ニ之ヲ返還セシムヘシ

第四條　投票所ハ概略別記樣式ニ從ヒ選擧人ノ多少ニ依テ適宜之ヲ斟酌シ受付所選擧人控所選擧人名簿對照投票簿捺印及投票用紙交付所投票記載所投票ノ場所等ヲ設備スヘシ

第五條　投票ハ投票記載ノ爲設ケタル卓上ニ於テ之ヲ記載セシメ其ノ記載終リタルトキハ直ニ投函セシムヘシ

投票記載ノ爲設ケタル卓上ニハ筆硯墨ヲ備ヘ置キ投票記載ニ支障ナカラシムヘシ

第六條　選擧人出入ノ門戶及投票所出入口等ニハ警察官吏又ハ特ニ設ケタル取締人ヲ配置シ取締ヲ爲サシムヘシ

第七條　衆議院議員選擧法第四十條ニ依リ投票函閉鎖ノ後ハ開票管理者ニ送致スル迄ノ間投票函ハ之ヲ投票所外ニ轉送スルコトヲ得ス

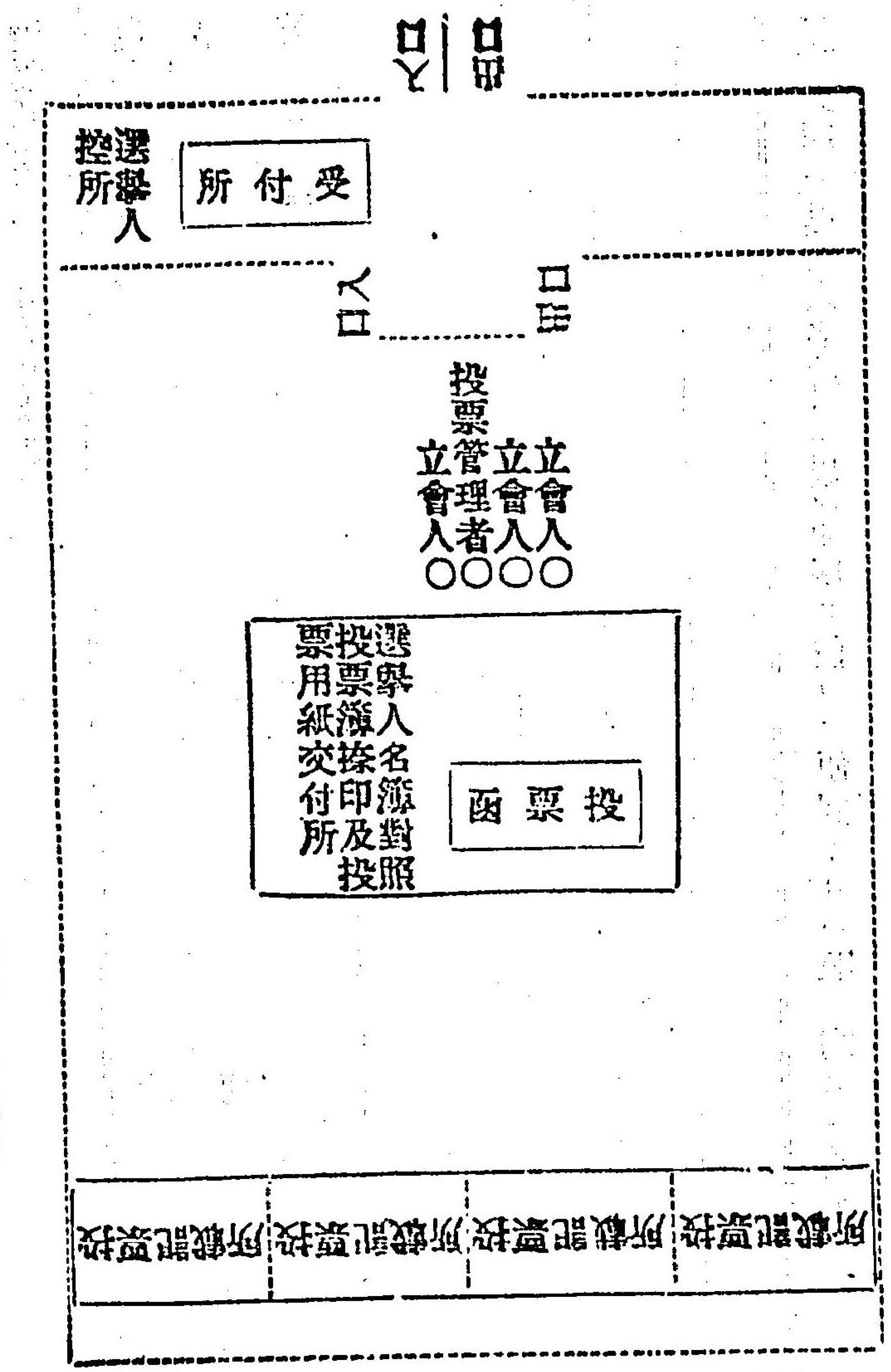
第八條　衆議院議員選擧法第六十六條ニ依リ選任シタル選擧立會人其ノ職ヲ辭シタル場合ニ於テ選擧會開會ノ日ヨリ少ナクトモ三日前ニ之ヲ本人ニ通知スルコトヲ得ヘキ餘日ヲ存スルトキハ同條ニ依リ更ニ選擧立會人ヲ選任スヘシ

第九條　衆議院議員選擧法第七十條ノ手續ハ選擧會ニ於テ之ヲ行フヘシ

第十條　投票簿投票錄開票錄選擧錄點數簿ハ別記樣式ニ依リ之ヲ調製スヘシ
投票錄開票錄選擧錄ハ謄本ヲ調製シ選擧人又ハ被選擧人ノ請求アリタルトキハ之ヲ閲覽セシムヘシ

第十一條　當選證書ハ別記樣式ニ依リ之ヲ調製スヘシ

第十二條　投票所開票所選擧會場ニハ各其ノ門戶ニ標札ヲ揭クヘシ



投票簿樣式（用紙美濃紙）

選擧人名簿番號	氏名
第一號	何 某 印
第二號	、、、、

一 投票簿ハ選擧人名簿ノ番號順序ニ依ラス便宜イロハ順ト爲スモ妨ケナシ

投票錄樣式

何府縣郡市町村衆議院議員投票所投票錄

（欄上）何年何月何日　投票執行

一 投票所ハ何町村役場（何市役所）（何ノ場所）ニ之ヲ設ケタリ

二 左ノ投票立會人ハ何レモ投票時刻マテニ投票所ニ參會シタリ

住所　氏名

住所　氏名

住所　氏名

投票時刻ニ至リ投票立會人中何名參會セサルニ由リ投票管理者ハ臨時ニ投票區内ニ於ケル選擧人中ヨリ左ノ者ヲ投票立會人ニ選任シタリ

住所　氏名

三 投票場ハ何年何月何日午前第七時ニ之ヲ開キタリ

四 投票立會人中氏名ハ一旦參會シタルモ午前後第何時何々ノ事故ヲ以テ其職ヲ辭シタル爲其ノ定數ヲ缺キタルニ由リ投票管理者ハ臨時ニ投票區内ニ於ケ

ル選擧人中ヨリ午前(後)第何時左ノ者ヲ投票立會人ニ選任シタリ

住所　氏　名

五　投票管理者ハ投票立會人ト共ニ投票ニ先チ投票所ニ參集シタル選擧人ノ面前ニ於テ投票函ヲ開キ其ノ空虚ナルコトヲ示シタル後内蓋ヲ鎖シ投票管理者及投票立會人ノ列席スル面前ニ之ヲ置キタリ

六　投票管理者及投票立會人ノ面前ニ於テ選擧人ヲシテ逐次其ノ住所氏名ヲ自稱セシメ選擧人名簿ニ對照シ且ツ投票簿ニ捺印セシメタル後（到著番號札ト引換ニ）投票用紙ヲ交付シタリ

七　選擧人ハ自ラ投票ヲ認メ之ヲ投票函ニ投入シタリ

八　投票管理者ハ左ノ選擧人ノ本人ナルヤ否ヤヲ確認スルコト能ハサリシヲ以テ投票立會人ノ面前ニ於テ其ノ本人ナル旨ヲ宣言セシメ投票所ノ事務ニ從事スル職氏名ヲシテ之ヲ筆記セシメ之ヲ選擧人ニ讀ミ聞カセ選擧人ヲシテ之ニ署名捺印セシメタリ

住所　氏　名

投票管理者ハ左ノ選擧人ノ本人ナルヤ否ヤヲ確認スルコト能ハサリシヲ以テ投票立會人ノ面前ニ於テ其ノ本人ナル旨ノ宣言ヲ命シタルモ其ノ宣言ヲ爲サヽルニ依リ本人ニアラスト認メ之ヲ投票所外ニ退出セシメタリ

住所　氏　名

九　左ノ選擧人ハ選擧人名簿ニ登錄ナキモ之ニ登錄セラルヘキ確定判決書ヲ所持シ投票所ニ到著シタルニ依リ投票管理者ハ之ヲシテ投票セシメタリ

住所　氏　名

十　左ノ選擧人ハ何々ノ事由ニ依リ投票管理者ニ於テ投票立會人ノ意見ヲ聽キ投票ヲ拒否シタリ

住所　氏　名

左ノ選擧人ハ何々ノ事由ニ依リ投票管理者ニ於テ投票立會人ノ意見ヲ聽キ投票ヲ拒否スヘキ旨決定シタルモ同選擧人ニ於テ不服ヲ申立ツルヲ以テ（投票立會人氏名ニ於テ異議アルヲ以テ）假ニ投票ヲ爲サシメタリ

住所　氏　名

十一　左ノ選擧人ハ誤テ投票用紙、封筒ヲ汚損シタル旨ヲ以テ更ニ之ヲ請求シタルニ依リ其ノ相違ナキヲ認メ之ト引換ニ投票用紙、封筒ヲ交付シタリ

住所　氏名

十二　左ノ選擧人ハ投票所ニ於テ演説討論ヲ爲シ（喧騷ニ渉リ）（投票ニ關シ協議若ハ勸誘ヲ爲シ）（何々ニ因リ）投票所ノ秩序ヲ紊リタルニ依リ投票管理者ニ於テ之ヲ制止シタルモ其ノ命ニ從ハサルヲ以テ投票用紙（到著番號札）ヲ取上ケ之ヲ投票所外ニ退出セシメタリ

住所　氏名

十三　投票管理者ハ投票所ノ入口ヲ鎖スニ先チ投票所外ニ退出ヲ命シタル選擧人ニ對シ入場ヲ許シタルニ左ノ選擧人入場シタルヲ以テ投票セシメタリ

住所　氏名

十四　午後第六時ニ至リ投票管理者ハ投票所ヲ閉ツヘキ時刻ニ至リタル由ヲ告ケ投票所ノ入口ヲ鎖シタリ

十五　午後第何時投票所ニ在ル選擧人ノ投票結了シタルヲ以テ投票管理者ハ投票立會人ト共ニ投票函ノ內蓋ノ投票口及外蓋ヲ鎖シタリ

十六　投票函ヲ閉鎖シタルニ依リ其ノ內蓋ノ鑰ハ投票函ヲ送致スヘキ左ノ投票立會人之ヲ保管シ外蓋ノ鑰ハ投票管理者之ヲ保管ス

氏名

十七　投票函、投票錄及選擧人名簿ヲ開票管理者ニ送致スヘキ投票立會人左ノ如シ

氏名

十八　左ノ何名ハ投票所ノ事務ニ從事シタリ

職　氏名

職　氏名

十九　投票所ニ臨監シタル官吏左ノ如シ

官職　氏名

二十　選擧人名簿ニ記載セラレタル者ノ總數　何人

投票シタル選擧人ノ總數　何人

投票拒否ノ決定ヲ受ケタル者ノ總數　何　人

内

假ニ投票ヲ爲サシメタル者　何　人

二十一　以上ノ外投票ニ關シ投票管理者ニ於テ緊要ト認ムル事項アルトキハ之ヲ記載スヘシ

何年何月何日

投票管理者ハ此ノ投票錄ヲ作リ之ヲ朗讀シタル上投票立會人ト共ニ茲ニ署名ス

投票管理者

何市町村長　氏　名

投票立會人　氏　名

氏　名

氏　名

開票錄樣式

何府縣郡市衆議院議員開票所開票錄

欄上　何年何月何日　開票執行

一　開票所ハ何郡市役所(何ノ場所)ニ之ヲ設ケタリ

二　左ノ開票立會人ハ何レモ開票時刻マテニ開票所ニ參會シタリ

住所　氏名

住所　氏名

住所　氏名

開票時刻ニ至リ開票立會人中何名參會セサルニ由リ開票管理者ハ臨時ニ開票區內ニ於ケル選擧人中ヨリ左ノ者ヲ開票立會人ニ選任シタリ

住所　氏名

三　何年何月何日各投票所ノ投票函總テ到達シタルヲ以テ(郡)

何年何月何日投票ヲ了リタルヲ以テ(市)

其ノ翌何日開票所ヲ開キ午前第何時ヨリ開票ヲ行フ

四　開票立會人中氏名ハ一旦參會シタルモ午前/後第何時何々ノ事故ヲ以テ其ノ職

ヲ辭シタル爲其ノ定數ヲ缺キタルニ由リ開票管理者ハ臨時ニ開票區內ニ於ケル選擧人中ヨリ午前(後)第何時左ノ者ヲ開票立會人ニ選任シタリ

住所　氏名

五　開票管理者ハ開票立會人立會ノ上逐次投票函ヲ開キ投票ノ總數ト投票人ノ總數トヲ計算シタルニ左ノ如シ

投票數　何票

投票人數　何人

外

假ニ爲シタル投票數　何票

假ニ爲シタル投票人數　何人

投票總數ト投票人總數ト符合セリ

投票總數ト投票人總數ト符合セス即投票總數ハ投票人總數ニ比シ何票多ク又ハ少シ(其ノ理由ノ明カナルモノハ之ヲ記載スヘシ)

六　投票管理者ヨリ拒否ノ決定ヲ受ケタル者ニ於テ假ニ投票ヲ爲シタル者左ノ如シ

住所　氏名

住所　氏名

開票管理者ハ右ノ投票ヲ調査シ開票立會人ノ意見ヲ聽キ左ノ通之ヲ決定シタリ

受理セシモノ

一　事由何々　住所　氏名

一　事由何々　住所　氏名

受理セサリシモノ

一　事由何々　住所　氏名

一　事由何々　住所　氏名

七　開票管理者ハ各投票所ノ投票ヲ混同シ開票立會人ト共ニ投票ヲ點檢シ開票管理者ハ毎票記載ノ氏名ヲ朗讀シタリ

八　選擧事務ニ從事スル官職氏名及官職氏名ノ二名ハ投票記載ノ氏名ノ朗讀ニ

聽シ各別ニ同一被選擧人ノ得票ヲ點數簿ニ記入シ且其ノ一名ニ於テ各被選擧人ノ得票ヲ記入スル毎ニ其ノ得票數ヲ呼ヒ他ノ一名ト共ニ其ノ得票數ヲ校合シタリ

九　開票管理者ニ於テ開票立會人ノ意見ヲ聽キ有效又ハ無效ト決定シタル投票左ノ如シ

一　有效ト決定シタルモノ　何票

一　無效ト決定シタルモノ　何票

内

一　成規ノ用紙ヲ用ヒサルモノ　何票

二　一投票中二人以上ノ被選人ヲ記載シタルモノ　何票

三　被選擧人ノ何人タルヲ確認シ難キモノ　何票

四

五

總計　何票

十　午後第何時投票ノ點檢ヲ了リタルヲ以テ開票管理者ハ各被選擧人ノ得票數ヲ朗讀シタリ

十一　被選擧人ノ得票數左ノ如シ

何票　氏名

何票　氏名

十二　開票管理者ハ點檢濟投票ノ有效無效及不受理ノ決定アリタル投票ヲ大別シ尚有效ノ決定アリタル投票ニ在テハ得票者毎ニ之ヲ區別シ無效ノ決定アリタル投票ニ在テハ之ヲ類別シテ各別ニ之ヲ封筒ニ入レ開票立會人ト共ニ之ニ封印シタリ

十三　午前/後第何時開票所ノ事務ヲ結了ス

十四　左ノ何名ハ開票所ノ事務ニ從事シタリ

官職　氏名

官職　氏名

十五　開票所ニ臨監シタル官吏左ノ如シ

官職　氏　名

十六　以上ノ外開票ニ關シ開票管理者ニ於テ緊要ト認ムル事項アルトキハ之ヲ記載スヘシ

開票管理者ハ此ノ開票錄ヲ作リ之ヲ朗讀シタル上開票立會人ト共ニ玆ニ署名ス

何年何月何日

開票管理者
何郡市長　氏　名

開票立會人　氏　名
氏　名
氏　名

選擧錄樣式

何府縣郡部（何市）（何市郡部）衆議院議員選擧會選擧錄

（欄上）何年何月何日選擧會開會

一　選擧會ハ何年何月何日何ノ場所ニ於テ之ヲ開キ午前第何時ヨリ其ノ事務ヲ開始シタリ

二　左ノ選擧立會人ハ何レモ選擧會開會ノ時刻マテニ選擧會ニ參會シタリ

住所　氏　名
住所　氏　名
住所　氏　名

選擧會開會ノ時刻ニ至リ選擧立會人中何名參會セサルニ由リ選擧長ハ臨時ニ選擧區內ニ於ケル選擧人中左ノ者ヲ選擧立會人ニ選任シタリ

住所　氏　名

三　選擧立會人中氏名ハ一旦參會シタルモ午前（後）第何時何々ノ事故ヲ以テ其ノ職ヲ辭シタル爲其ノ定數ヲ缺キタルニ由リ選擧長ハ臨時ニ選擧區內ニ於ケル選擧人中ヨリ午前（後）第何時左ノ者ヲ選擧立會人ニ選任シタリ

住所　氏　名

四　選擧長ハ選擧立會人立會ノ上開票管理者ノ報告書ヲ逐次調査シ每開票區得

票者ノ氏名及其ノ得票數ヲ朗讀シ終ニ各得票者ノ得票總數ヲ朗讀シタリ其ノ得票總數左ノ如シ

何　票　氏　名

何　票　氏　名

何　票　氏　名

五　選擧區内ノ議員定數何人ヲ以テ選擧人名簿ニ記載セラレタル者ノ總數何人ヲ除シテ得タル數ハ何人ニシテ此ノ五分ノ一ノ數ハ何票ナリ得票者中此ノ數ニ達スルモノヲ擧クレハ左ノ如シ

何　票　氏　名

何　票　氏　名

右ノ内有效投票ノ最多數ヲ得タル左ノ何名ヲ以テ當選人トス

氏　名

氏　名

（但シ氏名及氏名ハ得票ノ數相同キニ依リ其ノ生年月ヲ調査スルニ氏名ハ何年何月生氏名ハ何年何月生ニシテ

此氏名年長者ナルヲ以テ則氏名ヲ以テ當選人ト定メタリ

同年月ナルヲ以テ選擧長ニ於テ抽籤シタルニ氏名當籤セリ依テ氏名ヲ以テ當選人ト定メタリ）

六　午後第何時選擧會ノ事務ヲ結了ス

七　左ノ何名ハ選擧會ノ事務ニ從事シタリ

官職　氏　名

官職　氏　名

八　以上ノ外選擧ニ關シ選擧長ニ於テ緊要ト認ムル事項アルトキハ之ヲ記載スヘシ

選擧長ハ此ノ選擧錄ヲ作リ之ヲ朗讀シタル上選擧立會人ト共ニ茲ニ署名ス

何年何月何日

選擧長

何府縣知事　氏　名

選擧立會人

氏名
氏名
氏名

衆議院議員當選證書樣式　用紙鳥ノ子四ツ切

衆議院議員當選證書

住所

氏名

右ノ者何府縣（何府縣郡部）（何府縣何市）選擧區ニ於テ衆議院議員ニ當選シタルコトヲ證ス

年　月　日

地方長官　氏　名　印

點數簿樣式　用紙美濃紙

得票總數	一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇	〇 〇 〇 〇 〇	二〇	四〇	六〇	八〇	一〇〇	一二〇	一四〇	一六〇	一八〇
氏名	一 二 三 四 五 六 七 八 九 一〇	一〇	三〇	五〇	七〇	九〇	一一〇	一三〇	一五〇	一七〇	一九〇

●貴族院令（明治二十二年二月十一日勅令第十一號）

朕大日本帝國憲法ノ明文ニ依リ樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ貴族院令ヲ發布ス此ノ勅令ヲ實施スルノ時期ハ朕カ更ニ命スル所ニ依ルヘシ

貴族院令

第一條 貴族院ハ左ノ議員ヲ以テ組織ス

一 皇族

二 公侯爵

三 伯子男爵各〻其ノ同爵中ヨリ選擧セラレタル者

四 國家ニ勳勞アリ又ハ學識アル者ヨリ特ニ勅任セラレタル者

五 各府縣ニ於テ土地或ハ工業商業ニ付多額ノ直接國稅ヲ納ムル者ノ中ヨリ一人ヲ互選シテ勅任セラレタル者

第二條 皇族ノ男子成年ニ達シタルトキハ議席ニ列ス

第三條 公侯爵ヲ有スル者滿二十五歲ニ達シタルトキハ議員タルヘシ

第四條 伯子男爵ヲ有スル者ニシテ滿二十五歲ニ達シ各〻其ノ同爵ノ選ニ當リタル者ハ七箇年ノ任期ヲ以テ議員タルヘシ其ノ選擧ニ關スル規則ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

前項議員ノ數ハ伯爵十七人以內、子爵七十人以內、男爵六十三人以內トシ各爵其ノ總數ノ五分ノ一ヲ超過スヘカラス（四十二年勅令第九十二號ヲ以テ改正）

第五條 國家ニ勳勞アリ又ハ學識アル滿三十歲以上ノ男子ニシテ勅任セラレタル者ハ終身議員タルヘシ

前項議員ノ數ハ百二十五人ヲ超過スヘカラス（三十八年勅令第五十八號ヲ以テ本項追加）

第六條 各府縣ニ於テ滿三十歲以上ノ男子ニシテ土地或ハ工業商業ニ付多額ノ直接國稅ヲ納ムル者十五人ノ中ヨリ一人ヲ互選シ其ノ選ニ當リ勅任セラレタル者ハ七箇年ノ任期ヲ以テ議員タルヘシ其ノ選擧ニ關スル規則ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 國家ニ勳勞アリ又ハ學識アル者及各府縣ニ於テ土地或ハ工業商業ニ付多

額ノ直接國稅ヲ納ムル者ヨリ勅任セラレタル議員ハ有爵議員ノ數ニ超過スルコトヲ得ス

第八條　貴族院ハ天皇ノ諮詢ニ應ヘ華族ノ特權ニ關ル條規ヲ議決ス

第九條　貴族院ハ其ノ議員ノ資格及選擧ニ關ル爭訟ヲ判決ス其ノ判決ニ關ル規則ハ貴族院ニ於テ之ヲ議定シ上奏シテ裁可ヲ請フヘシ

第十條　議員ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ又ハ身代限ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ勅命ヲ以テ之ヲ除名スヘシ

貴族院ニ於テ懲罰ニ由リ除名スヘキ者ハ議長ヨリ上奏シテ勅裁ヲ請フヘシ

除名セラレタル議員ハ更ニ勅許アルニ非サレハ再ヒ議員トナルコトヲ得ス

第十一條　議長副議長ハ議員中ヨリ七箇年ノ任期ヲ以テ勅任セラルヘシ

被選議員ニシテ議長又ハ副議長ノ任命ヲ受ケタルトキハ議員ノ任期間其ノ職ニ就クヘシ

第十二條　此ノ勅令ニ定ムルモノヽ外ハ總テ議院法ノ條規ニ依ル

第十三條　將來此ノ勅令ノ條項ヲ改正シ又ハ增補スルトキハ貴族院ノ議決ヲ經ヘシ

●貴族院令並貴族院伯子男爵議員選擧規則及貴族院多額納稅者議員互選規則施行ノ詔勅

（明治二十三年二月二十八日）

朕曩ニ公布セシムル所ノ貴族院令並ニ貴族院伯子男爵議員選擧規則及貴族院多額納稅者議員互選規則ヲ本年ヨリ施行スルコトヲ命ス但シ未タ一般ノ地方制度ヲ準行セサル北海道沖縄縣及小笠原島ニ於テハ仍貴族院多額納稅者議員互選規則施行ノ效力ヲ及ホサス

●貴族院伯子男爵議員選擧人員ニ關スル詔勅

（明治三十七年四月十九日）

朕貴族院令第四條及貴族院伯子男爵議員選擧規則第五條ニ依リ伯子男爵ハ本年ノ選擧期ニ於テ左ノ員數ヲ選擧スヘキコトヲ命ス

伯爵　十七人
子爵　七十人
男爵　五十六人

● 貴族院伯子男爵議員選擧規則（明治二十二年六月五日勅令第七十八號）

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ貴族院伯子男爵議員選擧規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此ノ勅令ヲ實施スルノ時期ハ朕カ更ニ命スル所ニ依ルヘシ

貴族院伯子男爵議員選擧規則

第一條　伯子男爵ヲ有スル成年以上ノ者ハ各〻其ノ同爵者ノ貴族院議員ヲ選擧ス

第二條　神官及諸宗ノ僧侶又ハ教師ハ被選人タルコトヲ得ス

第三條　左ノ項ノ一ニ觸ルヽ者ハ選擧人及被選人タルコトヲ得ス

一　瘋癲白癡ノ者

二　身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者

第四條　刑事ノ訴ヲ受ケ拘留又ハ保釋中ニ在ル者ハ其ノ裁判確定ニ至ルマテ選擧權ヲ行フコトヲ得ス及被選人タルコトヲ得ス

第五條　貴族院令第四條ニ依リ選ハルヘキ議員ノ數ハ選擧ヲ行フノ前勅命ヲ以テ之ヲ指定スヘシ

第六條　爵位局長官ハ選擧ノ期日ヨリ五十日前ニ選擧資格ヲ有スル伯子男爵ノ人名簿ヲ各別ニ調製シ選擧資格ヲ有スル同爵者ニ配付シ三十日前ニ之ヲ確定シテ各選擧管理者ニ交付スヘシ

確定期日ノ前ニ於テ新ニ資格ヲ得及回復シタル者アルトキハ之ヲ名簿ニ記入スヘシ

第七條　選擧ハ伯子男爵ノ選擧資格ヲ有スル者ヨリ各〻一人ノ選擧管理者ヲ互選シテ之ヲ管理セシム

選擧管理者ハ貴族院令第四條ニ依リ議員ノ更任アル毎ニ之ヲ改選スヘシ

選擧管理者ハ選擧及被選ノ權ヲ妨ケラルヽコトナシ

第八條　各選擧管理者ハ選擧人ノ中ヨリ各〻其ノ同爵ノ選擧立會人三人以上ヲ指定シテ選擧會場ニ參會セシムヘシ

第九條　選擧ハ七月十日東京ニ於テ之ヲ行フ

第十條　選擧人ハ自ラ選擧會場ニ至リ投票スヘシ

投票ハ被選人ノ爵姓名ヲ列記シ次ニ自己ノ爵姓名ヲ記載スヘシ

第十一條　選擧人東京府ノ外ニ居住シ又ハ疾病事故ニ因リ選擧會場ニ至ルコト能ハサルトキハ同爵中ノ他ノ選擧人ニ投票ヲ委託スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ投票ヲ封緘シ其ノ表面ニ記名捺印シ委託ノ證狀ト共ニ委託ヲ受クル者ニ送付スヘシ

第十二條　投票ノ最多數ヲ得タル者ヲ以テ當選人トス

投票同數ナルトキハ生年月ノ長者ヲ以テ當選人トス同年月ナルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第十三條　前數條ニ掲ケタル者ノ外選擧ニ關スル一切ノ規程ハ選擧資格ヲ有スル伯子男爵ノ協議ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第十四條　當選人確定シタルトキハ選擧管理者ハ其ノ爵姓名ヲ上奏シ併セテ貴族院議長ニ報告スヘシ

第十五條　選擧管理者ハ選擧明細書ヲ作リ選擧ニ關ル一切ノ事項ヲ記載シ立會人ト共ニ署名捺印シ其ノ副本ヲ貴族院ニ送致スヘシ

第十六條　議員ニ闕員ヲ生シタルトキハ議長ヨリ之ヲ上奏シ勅旨ヲ以テ補闕選擧ヲ行フヘキコトヲ命シ及其ノ期日ヲ指定スヘシ

補闕選擧ヲ行フノ手續ハ通常選擧ノ例ニ同シ

第十七條　補闕議員ノ任期ハ前議員ノ任期ニ依ル

第十八條　貴族院令第九條ニ依リ貴族院ニ出訴スルノ期限ハ貴族院開會ノ後十日以內トス

第十九條　選擧ニ關ル費用ハ同爵者ノ支辨タルヘシ

◉貴族院多額納稅者議員互選規則

（明治二十二年六月五日勅令第七十九號）

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ貴族院多額納稅者議員互選規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

此ノ勅令ヲ實施スルノ時期ハ朕カ更ニ命スル所ニ依ルヘシ

貴族院多額納稅者議員互選規則

貴族院多額納稅者議員互選規則

第一條　貴族院令第六條ニ依リ貴族院議員ヲ互選スル者ハ互選名簿調製ノ期日ヨリ滿一年以上其ノ府縣內ニ於テ本籍ヲ定メ住居シ多額ノ直接國稅ヲ納メ仍引續キ住居シ及納稅スル者タルヘシ

第二條　家督ニ由リ財產ヲ相續シタル者ハ其ノ財產ニ付前財產主ノ納稅額ヲ以テ其ノ納稅資格ニ算入ス

第三條　神官及諸宗ノ僧侶又ハ教師ハ互選人タルコトヲ得ス

第四條　左ノ項ノ一ニ觸ルヽ者ハ互選人タルコトヲ得ス

一　瘋癲白癡ノ者

二　公權ヲ剝奪セラレタル者又ハ停止中ノ者

三　禁錮ノ刑ニ處セラレ滿期ノ後又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サル者

四　舊法ニ依リ懲役ノ刑ニ處セラレ滿期ノ後又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サル者

五　賭博犯ニ由リ處刑ヲ受ケ滿期ノ後又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サル者

六　衆議院議員ノ選擧ニ關ル犯罪ニ依リ選擧權及被選權ノ停止中ノ者

第五條　陸海軍軍人ハ現役中互選人タルコトヲ得ス其ノ休職停職ニ在ル者亦同シ

第六條　刑事ノ訴ヲ受ケ拘留又ハ保釋中ニ在ル者ハ其ノ裁判確定ニ至ルマテ互選人タルコトヲ得ス

第七條　互選人選擧ニ關リ輕罪以上ノ罪ヲ犯シタルトキハ互選名簿ヨリ除名セラルヘシ

第八條　府縣知事ハ選擧ヲ行フノ年四月一日ヲ期トシ其ノ府縣ニ於テ互選資格ヲ有スル者十五人ノ名簿ヲ調製スヘシ

互選名簿ハ互選人ノ姓名、職業、身分、住所、生年月、土地或ハ工業商業ニ付納ムル所ノ直接國稅ノ細別及總額並ニ納稅地ヲ記載スヘシ

第九條　納稅同額ノ者アルトキハ生年月ノ長者ヲ先ニシ同年月ノ者ハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第十條　府縣知事ハ四月二十日マテニ互選名簿ヲ各互選人ニ配付シ併セテ之ヲ管內ニ告示スヘシ

第十一條　互選資格ヲ得ヘキ者ニシテ自ラ互選名簿ニ記載セラレサルコトヲ發見

シタルトキハ告示ノ後十五日以内ニ其ノ理由書及證憑ヲ具ヘテ府縣知事ニ申立ツルコトヲ得

凡テ互選資格ヲ得タル者ハ互選資格ヲ得ヘカラサル者ノ互選名簿ニ記載セラレタルコトヲ發見シタルトキハ前項ノ手續ニ依リ改正ヲ求ムルコトヲ得

期限ヲ經過シタル後申立ヲ爲スモ其ノ效ナシ

第十二條　府縣知事前條ノ申立ヲ受ケタルトキハ之ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ判定スヘシ判定ノ結果ニ依リ名簿ヲ改正シタルトキハ其ノ由ヲ關係人ニ通知シ併セテ管内ニ告示スヘシ

第十三條　互選名簿ハ六月一日ヲ以テ確定期限トス

第十四條　選擧ハ六月十日府縣廳ニ於テ之ヲ行ヒ府縣知事又ハ其ノ代理者之ヲ管理ス

第十五條　府縣知事ハ投票ノ時刻ヲ定メ遲クトモ選擧ノ期日ヨリ七日前ニ各互選人ニ通知書ヲ發スヘシ

第十六條　互選人ハ自ラ選擧會場ニ至リ投票スヘシ

投票ハ被選人ノ姓名ヲ記載シ次ニ自己ノ姓名ヲ記載スヘシ

第十七條　互選人疾病事故ニ因リ選擧會場ニ至ルコト能ハサルトキハ醫師ノ診斷書又ハ事由書ヲ具ヘ投票ヲ封緘シ其ノ表面ニ記名捺印シテ之ヲ他ノ互選人ニ委託スルコトヲ得

第十八條　投票終ルノ後選擧管理者ハ互選人ノ面前ニ於テ投票ヲ點檢シ其ノ結果ヲ告知スヘシ但シ當選人其ノ場ニ在ラサルトキハ文書ヲ以テ速ニ其ノ由ヲ本人ニ通知スヘシ

第十九條　投票效力ノ有無ニ付疑義アルトキハ選擧管理者之ヲ決定ス

第二十條　投票ノ最多數ヲ得タル者ヲ以テ當選人トス

投票同數ナルトキハ生年月ノ長者ヲ以テ當選人トス同年月ナルトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第二十一條　當選人ニシテ其ノ當選ヲ辭スルトキハ次ノ投票多數ヲ得タル者ヲ以テ當選人トスヘシ

當選人當選ヲ辭スルコトヲ得ルハ選擧ノ日ヨリ十日以内ニ限ル

第二十二條　當選人確定シタルトキハ府縣知事ハ當選人ノ資格及選擧ノ顚末ヲ錄シテ内閣總理大臣ニ報告スヘシ

第二十三條　選擧管理者ハ選擧明細書ヲ作リ選擧ニ關ル一切ノ事項ヲ記載シ署名捺印シ其ノ副本ヲ貴族院ニ送致スヘシ

第二十四條　議員ニ闕員ヲ生シタルトキハ議長ヨリ之ヲ上奏シ勅旨ヲ以テ補闕選擧ヲ行フヘキコトヲ其ノ府縣ニ命スヘシ

補闕選擧ヲ行フノ時期及手續ハ通常選擧ノ例ニ同シ

第二十五條　補闕議員ノ任期ハ前議員ノ任期ニ依ル

第二十六條　貴族院令第九條ニ依リ貴族院ニ出訴スルノ期限ハ開會ノ後十日以内トス

●貴族院多額納税者議員補闕選擧ニ關スル件

（明治二十七年五月二十八日勅令第五十七號）

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ貴族院多額納税者議員ノ補闕選擧ニ關スル件ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

第一條　府縣知事ハ貴族院多額納税者議員ノ補闕選擧ノ命ヲ受ケタル日ヲ期トシ其ノ府縣ニ於テ互選資格ヲ有スル者十五人ノ名簿ヲ調製シ其ノ期日後二十日以内ニ之ヲ各互選人ニ配付シ併セテ之ヲ管内ニ告示スヘシ

第二條　前條ノ互選名簿ハ告示後四十日ヲ經過スルトキハ確定トス

第三條　貴族院多額納税者議員ノ補闕選擧ハ互選名簿確定後十日目ニ之ヲ行フヘシ

●貴族院多額納税者議員互選規則取扱方

（明治二十三年三月十日内務省訓令第七號）

府　縣沖繩縣ヲ除ク

明治二十二年六月勅令第七十九號貴族院多額納税者議員互選規則取扱方左之通心得ラルヘシ

第一條　貴族院令第六條ニ滿三十歳トアルハ其選擧期日（六月十日）前滿三十歳ニ

達スル者ヲ指ス

第二條　互選規則第一條ニ其府縣内ニ於テ本籍ヲ定メ住居トアルハ衆議院議員選擧法施行規則第二條ノ例ニ異ナラス

第三條　互選規則第一條ニ多額ノ直接國税トアルハ地租及土地又ハ工業商業ノ利益ヨリ生スル所得納税額而已ヲ合算シテ名簿調製ノ期日（四月一日）前滿一年以上多額ノ直接國税ヲ納メ仍引續キ納ムルモノヲ云フ

第四條　賣買讓與等ニ依リ土地所有權ノ移轉スルアルモ地租ハ土地臺帳記名者ノ納税資格ニ算入シ又質入地ノ地租ハ質權者ノ納税資格ニ算入ス數人共有ノ土地ヨリ納ムル地租ノ計算方及互選規則第三條ニ神官及諸宗ノ僧侶又ハ教師トアルハ凡テ衆議院議員選擧法施行規則第五條第九條ノ例ニ異ナラス（三十七年内務省訓令第五號ヲ以テ條中改正）

第五條　貴族院令第六條ニ多額ノ直接國税ヲ納ムル者トアル中ニハ華族（公侯爵ヲ除ク）ノ當主ヲモ包含ス

第六條　貴族院令第六條ニ云フ其選ニ當リ勅任セラレタル者ハ其任期中納税額ノ減スルコトアルモ同令第十條ノ場合ニアラサレハ其議員ノ資格ヲ失ハサルハ勿論ナリトス

第七條　互選ニ關スル費用ハ府縣廳費ノ支辨ニ屬ス

●貴族院令ニ於テ直接國税ト稱スル種目

（明治二十二年三月二十七日勅令第四十一號）

朕衆議院議員選擧法及貴族院令ニ於テ直接國税ト稱スル種目ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

衆議院議員選擧法及貴族院令ニ於テ直接國税ト稱スルモノ左ノ如シ（衆議院議員選擧法ニ關スル分ハ同法施行令第三十三條ニ依リ消滅）

地　租

所得税

營業税（二十九年勅令第二百六十三號ヲ以テ追加）

●貴族院議員ノ兼務スルヲ得サル宮内官職

貴族院令ニ於テ直接國税ト稱スル種目　貴族院議員ノ兼務スルヲ得サル宮内官職

（明治二十三年七月八日 宮內省達第十二號）

貴族院議員ノ選擧ニ應シタル者ハ宮內省中左ノ部局ノ職務ヲ兼ヌルコトヲ得ス

侍從職
式部職
皇太后宮職
皇后宮職
東宮職
大膳職
主殿寮
主馬寮
主獵局
帝室會計審査局
皇族家職

●帝國議會議長副議長議員歲費及旅費支給規則

（明治二十三年十月二十四日 勅令第二百六十三號）

朕帝國議會議長副議長議員歲費及旅費支給規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

帝國議會議長副議長議員歲費及旅費支給規則

第一條　帝國議會議長副議長及議員ノ歲費ハ每年七月ヨリ翌年六月ニ至ル十二箇月ヲ以テ一歲トシ計算ス

第二條　議長副議長及議員ノ歲費ハ其ノ前六箇月分ヲ帝國議會通常會開會ノ後三十日以內ニ其ノ後六箇月分ヲ閉會ノ後七日以內ニ支給ス

第三條　議長副議長ノ歲費ハ其ノ勅任セラレタル當月分ヨリ支給ス
議長副議長ニ勅任セラレタル議員ノ歲費ハ其ノ勅任セラレタル前月分マテ支給ス

第四條　貴族院勅任議員ノ歲費ハ其ノ勅任セラレタル當月分ヨリ支給ス（二十四年勅令第百七十九號ヲ以テ但書刪除）

第五條　議長副議長及議員退職辭職除名ノ場合ニ於テハ其ノ當月分マテヲ支給ス

第六條　衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ其ノ議長副議長及議員ノ歳費ハ解散ヲ命セラレタル當月分マテヲ支給ス

第七條　衆議院解散ヲ命セラレタル後選擧セラレタル議員及補缺議員ノ歳費ハ其ノ選擧セラレタル當月分ヨリ支給ス

第八條　衆議院ノ議員貴族院ノ議員トナリタルトキ其ノ他如何ナル場合ヲ問ハス歳費ハ同一人ニ對シ重複支給セス

第九條　官吏ニシテ議員タル者官吏ヲ罷メタルトキハ其ノ當月分ヨリ議員ニシテ官吏ニ任セラレタル者仍議員タルトキハ其ノ當月分マテヲ支給ス

第十條　議長副議長及議員ノ旅費ハ別表定ムル所ニ從ヒ之ヲ支給ス官吏ニシテ議員タル者亦同シ

上京旅費ハ歳費ノ前半額ト歸郷旅費ハ歳費ノ後半額ト同時ニ之ヲ支給ス

第十一條　旅費ハ當選區ノ何地ニ在ルヲ問ハス其ノ住居地ヨリ直路ノ里程ヲ計算シテ之ヲ支給ス

第十二條　議院ヲ距ル三里以内ノ地ニ住居スル者ハ何地ノ議員タルヲ問ハス旅費ヲ支給セス

第十三條　汽車旅行ハ一日二百哩詰汽船旅行ハ一日百海里詰陸路旅行ハ一日十二里詰ノ割合ヲ以テ直路ノ行程ニ應シ日當ヲ支給ス但シ一日ノ行程ニ滿タサル端數ハ切捨トス

第十四條　召集ニ應セサル議員ニハ事故ノ如何ヲ問ハス旅費ヲ支給セス

旅費表（三十年勅令第三百三十五號ヲ以テ改正）

汽車 一哩ニ付	汽船 一海里ニ付	車馬 一里ニ付	日當
五錢	六錢	二十五錢	三圓

◉會計法（明治二十二年二月十一日 法律第四號）

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ會計法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム

會計法

第一章　總則

第一條　政府ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

一會計年度所屬ノ歳入歳出ノ出納ニ關ル事務ハ翌年度十一月三十日マテニ悉皆完結スヘシ

第二條　租税及其ノ他一切ノ收納ヲ歳入トシ一切ノ經費ヲ歳出トシ歳入歳出ハ總豫算ニ編入スヘシ

第三條　各年度ニ於テ決定シタル經費ノ定額ヲ以テ他ノ年度ニ屬スヘキ經費ニ充ツルコトヲ得ス

第四條　各官廳ニ於テハ法律勅令ヲ以テ規定シタルモノヽ外特別ノ資金ヲ有スルコトヲ得ス

第二章　豫算

第五條　歲入歲出ノ總豫算ハ前年ノ帝國議會集會ノ始ニ於テ之ヲ提出スヘシ
必要避クヘカラサル經費及法律又ハ契約ニ基ツク經費ニ不足ヲ生シタル場合ノ外追加豫算ヲ提出スルコトヲ得ス(三十五年法律第四十七號ヲ以テ本項追加)

第六條　歲入歲出ノ總豫算ハ之ヲ經常臨時ノ二部ニ大別シ各部中ニ於テ之ヲ款項ニ區分スヘシ
總豫算ニハ帝國議會參考ノ爲ニ左ノ文書ヲ添附スヘシ
第一　各省ノ豫定經費要求書但シ各項中各目ノ明細ヲ記入スヘシ
第二　其ノ年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ歲入歲出現計書

第七條　豫算中ニ設クヘキ豫備費ハ左ノ二項ニ分ツ
第一豫備金
第二豫備金
第一豫備金ハ避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フモノトス
第二豫備金ハ豫算外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツルモノトス

第八條　豫備金ヲ以テ支辨シタルモノハ年度經過後帝國議會ニ提出シ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

第九條　每年度大藏省證券發行ノ最高額ハ帝國議會ノ協贊ヲ經テ之ヲ定ム

第三章　收入

第十條　租稅及其ノ他ノ歲入ハ法律命令ノ規程ニ從ヒ之ヲ徵收スヘシ
法律命令ニ依リ當該官吏ノ資格アル者ニ非サレハ租稅ヲ徵收シ又ハ其ノ他ノ歲入ヲ收納スルコトヲ得ス

第四章　支出

第十一條　每會計年度ニ於テ政府ノ經費ニ充ツル所ノ定額ハ其ノ年度ノ歲入ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第十二條　國務大臣ハ豫算ニ定メタル目的ノ外ニ定額ヲ使用シ又ハ各項ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得ス
國務大臣ハ其ノ所管ニ屬スル收入ヲ國庫ニ納ムヘシ直ニ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第十三條　國務大臣ハ其ノ所管定額ヲ使用スル爲ニ國庫ニ向ヒテ仕拂命令ヲ發スヘシ但シ別ニ定ムル所ノ規程ニ從ヒ他ノ官吏ニ委任シテ仕拂命令ヲ發セシムルコトヲ得

第十四條　國庫ハ法律命令ニ反スル仕拂命令ニ對シテ仕拂ヲ爲スコトヲ得ス

第十五條　國務大臣ハ政府ニ對シ正當ナル債主若ハ其ノ代理人ノ爲ニスルニ非サレハ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得ス

左ノ諸項ノ經費ニ限リ國務大臣ハ主任ノ官吏ニ委任シ又ハ政府ノ命シタル銀行ニ委任シテ現金支拂ヲ爲サシムル爲ニ現金前渡ノ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得

第一　國債ノ元利拂

第二　軍隊軍艦及官船ニ屬スル經費

第三　在外各廳ノ經費

第四　前項ノ外總テ外國ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費

第五　運輸通信ノ不便ナル內國ノ地方ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費

第六　廳中常用雜費ニシテ一箇年ノ總費額千圓ニ滿タサルモノ（三十五年法律第四十八號ヲ以テ本號中改正）

第七　場所ノ一定セサル事務所ノ經費

第八　各廳ニ以テ直接ニ從事スル工事ノ經費但シ一主任官ニ付六千圓マテヲ限ル（三十五年法律第四十八號ヲ以テ本號中改正）

第五章　決算

第十六條　會計檢查院ノ檢查ヲ經テ政府ヨリ帝國議會ニ提出スル總決算ハ總豫算ト同一ノ樣式ヲ用ヰ左ノ事項ノ計算ヲ明記スヘシ

歲入ノ部

歲入豫算額

調定濟歲入額

收入濟歲入額

收入未濟歲入額

歲出ノ部

歲出豫算額

豫算決定後增加歲出額

仕拂命令濟歲出額

翌年度繰越額

第十七條　前條ノ總決算ニハ會計檢査院ノ檢査報告ト倶ニ左ノ文書ヲ添附スヘシ

第一　各省決算報告書

第二　國債計算書

第三　特別會計計算書

第六章　期滿免除

第十八條　政府ノ負債ニシテ其ノ仕拂フヘキ年度經過後滿五箇年内ニ債主ヨリ支出ノ請求若ハ仕拂ノ請求ヲ爲サヽルモノハ期滿免除トシテ政府ハ其ノ義務ヲ免ルヽモノトス但シ特別ノ法律ヲ以テ期滿免除ノ期限ヲ定メタルモノハ各〻其ノ定ムル所ニ依ル

第十九條　政府ニ納ムヘキ金額ニシテ其ノ納ムヘキ年度經過後滿五箇年内ニ上納ノ告知ヲ受ケサルモノハ其ノ義務ヲ免ルヽモノトス但シ特別ノ法律ヲ以テ期滿免除ノ期限ヲ定メタルモノハ各〻其ノ定ムル所ニ依ル

第七章　歲計剩餘定額繰越豫算外收入及定額戾入

第二十條　各年度ニ於テ歲計ニ剩餘アルトキハ其ノ翌年度ノ歲入ニ繰入ルヘシ

第二十一條　豫算ニ於テ特ニ明許シタルモノ及一年度内ニ終ルヘキ工事又ハ製造ニシテ避クヘカラサル事故ノ爲ニ事業ヲ遲延シ年度内ニ其ノ經費ノ支出ヲ終ラサリシモノハ之ヲ翌年度ニ繰越シ使用スルコトヲ得

第二十二條　數年ヲ期シテ竣功スヘキ工事製造及其ノ他ノ事業ニシテ繼續費トシテ總額ヲ定メタルモノハ每年度ノ仕拂殘額ヲ竣功年度マテ遞次繰越使用スルコトヲ得

第二十三條　誤拂過渡トナリタル金額ノ返納出納ノ完結シタル年度ニ屬スル收入及其ノ他一切豫算外ノ收入ハ總テ現年度ノ歲入ニ組入ルヘシ但シ法律勅令ニ依リ前金渡概算渡繰替拂ヲ爲シタル場合ニ於ケル返納金ハ各〻之ヲ仕拂ヒタル經費ノ定額ニ戾入ルヽコトヲ得

第八章　政府ノ工事及物件ノ賣買貸借

第二十四條　法律勅令ヲ以テ定メタル場合ノ外政府ノ工事又ハ物件ノ賣買貸借ハ總テ公告シテ競爭ニ付スヘシ但シ左ノ場合ニ於テハ競爭ニ付セス隨意ノ約定ニ依ルコトヲ得ヘシ

第一　一人又ハ一會社ニテ專有スル物品ヲ買入レ又ハ借入ルヽトキ

第二　政府ノ所爲ヲ祕密ニスヘキ場合ニ於テ命スル工事又ハ物品ノ賣買貸借ヲ爲ストキ

第三　非常急遽ノ際工事又ハ物品ノ買入借入ヲ爲スニ競爭ニ付スル暇ナキトキ

第四　特種ノ物質又ハ特別使用ノ目的アルニ由リ生産製造ノ場所又ハ生産者製造者ヨリ直接ニ物品ノ買入ヲ要スルトキ

第五　特別ノ技術家ニ命スルニ非サレハ製造シ得ヘカラサル製造品及機械ヲ買入ルヽトキ

第六　土地家屋ノ買入又ハ借入ヲ爲スニ當リ其ノ位置又ハ構造等ニ限アル場合

第七　千圓ヲ超エサル工事又ハ物品ノ買入借入ノ契約ヲ爲ストキ（三十五年法律第四十八號ヲ以テ本號中改正）

第八　見積價格四百圓ヲ超エサル動産ヲ賣拂フトキ（同上）

第九　軍艦ヲ買入ルヽトキ

第十　軍馬ヲ買入ルヽトキ

第十一　試驗ノ爲ニ工作製造ヲ命シ又ハ物品ヲ買入ルヽトキ

第十二　慈恵ノ爲ニ設立セル救育所ノ貧民ヲ傭役シ及其ノ生産又ハ製造物品ヲ直接ニ買入ルヽトキ

第十三　囚徒ヲ傭役シ又ハ囚徒ノ製造物品ヲ直接ニ買入ルヽトキ及政府ノ設立ニ係ル農工業場ヨリ直接ニ其ノ生産又ハ製造物品ヲ買入ルヽトキ

第十四　政府ノ設立シタル農工業場又ハ慈恵教育ニ係ル各所ノ生産製造物品及囚徒ノ製造物品ヲ賣拂フトキ

第二十五條　軍艦兵器彈藥ヲ除ク外工事製造又ハ物件買入ノ爲ニ前金拂ヲ爲スコトヲ得ス

第九章　出納官吏

第二十六條　政府ニ屬スル現金若ハ物品ノ出納ヲ掌ル所ノ官吏ハ其ノ現金若ハ物品ニ付一切ノ責任ヲ負ヒ會計檢査院ノ檢査判決ヲ受クヘシ

第二十七條　前條ノ官吏水火盜難又ハ其ノ他ノ事故ニ由リ其ノ保管スル所ノ現金若ハ物品ヲ紛失毀損シタル場合ニ於テハ其ノ保管上避ケ得ヘカラサリシ事實ヲ會計檢査院ニ證明シ責任解除ノ判決ヲ受クルニ非サレハ其ノ負擔ノ責ヲ免ルヽコトヲ得ス

第二十八條　現金又ハ物品ノ出納ヲ掌ルニ付身元保證金ヲ納メシムルコトヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第十章　雜則

第二十九條　支拂命令ノ職務ハ現金出納ノ職務ト相兼ヌルコトヲ得ス

第三十條　特別ノ須要ニ因リ本法ニ準據シ難キモノアルトキハ特別會計ヲ設置スルコトヲ得

特別會計ヲ設置スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第三十一條　政府ハ國庫金ノ取扱ヲ日本銀行ニ命スルコトヲ得

第十一章　附則

第三十二條　本法ノ條項帝國議會ニ關涉セサルモノハ明治二十三年四月一日ヨリ施行シ其ノ關涉スルモノハ帝國議會開會ノ時ヨリ施行ス

決算ニ係ル條項ハ帝國議會ノ議定ヲ經タル年度ノ歲計ヨリ施行ス

第三十三條　本法ノ條項ト牴觸スル法令ハ各其ノ條項施行ノ日ヨリ廢止ス

◎會計規則（明治二十二年五月一日 勅令第六十號）

二十六年勅令第百十二號、三十三年勅令第百二十七號、三十四年勅令第百五十六號及三十五年勅令第二百號ヲ以テ改正削除

朕會計規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

會計規則

第一章　會計年度所屬區分、歲入歲出金出納

第一條　歲入ノ年度所屬ハ左ノ區分ニ據ル

第一　納期ノ一定シタル收入ハ其納期末日ノ屬スル年度

第二　隨時ノ收入ニシテ納額告知書ヲ發スルモノハ納額告知書ヲ發シタル日ノ屬スル年度

第三　隨時ノ收入ニシテ納額告知書ヲ發セサルモノハ領收ヲ爲シタル日ノ屬スル年度

第二條　歲出ノ所屬年度ハ左ノ區分ニ據ル

第一　公債ノ元利賞勳年金恩給諸祿ノ類ハ仕拂期日ノ屬スル年度

第二　諸拂戾缺損補塡ハ其拂戾又ハ補塡ノ決定ヲ達シタル日ノ屬スル年度

第三　俸給手數料旅費ノ類ハ其支給スヘキ事實ノ生シタル時ノ屬スル年度

第四　廳中雜費土木建築費其他物件ノ購入代價ノ類ハ契約ヲ爲シタル日ノ屬スル年度但土木建築費ノ如キ契約ノ數年ニ涉ルコトヲ得ヘキモノハ契約ニ據リ定メタル仕拂期日ヲ以テ區分スヘシ

第五　前各項ニ掲クル類別ニ入ラサル費用ハ總テ仕拂命令ヲ發シタル日ヲ以テ年度ノ所屬ヲ定ムヘシ

第三條　每年度所屬歲入歲出金ヲ金庫ニ於テ出納スルハ翌年度六月三十日限リトス

第二章　豫算

第一款　總豫算

第四條　大藏大臣ハ歲入ノ景況ヲ調査シ各省ノ豫定經費要求書ニ基キ歲入歲出總豫算ヲ調製スヘシ

第五條　歲入豫算ハ經常臨時共ニ款項ニ區分シテ調製シ成ルヘク歲入ノ性質ヲ明示スヘシ

總豫算ノ首ニハ歲計全體ニ關スル說明ヲ付スヘシ

第六條　歲出豫算ハ經常臨時共ニ款項ニ區分シテ調製シ成ルヘク經費ノ目的ヲ明ニスヘシ

第七條　歲入歲出總豫算款項ノ區分ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ

第二款　豫定經費要求書

第八條　各省大臣ハ每年度其所管經費ノ需用高ヲ算定シ前年度ノ定額ト比較ヲ立

テ豫定經費要求書ヲ調製シ前年度八月三十一日マテニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第九條　各省ノ豫定經費要求書ハ經常臨時共ニ款項ニ區分シ更ニ各項中所要ノ金額ヲ各目ニ區分シ尙ホ必要ノ場合ニ於テハ番號ヲ以テ之ヲ細分シ又經費所要ノ理由計算ノ基ク所ヲ示スヘシ

目ノ區分ハ各省大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ムヘシ

第十條　各省ノ豫定經費要求書ニハ各省所管經費全體ニ關スル說明及各款各項ノ說明ヲ付スヘシ

第三款　仕拂豫算

第十一條　各省大臣ハ每年度決定ノ豫算定額ニ基キ仕拂命令官每ニ所要ノ費額ヲ定メ仕拂豫算ヲ調製シ大藏大臣及會計檢査院ニ送付スヘシ

仕拂豫算ハ各項ノ金額ヲ示スヘシ

第十二條　仕拂豫算ヲ更定シタルトキハ其計算書ヲ大藏大臣及會計檢査院ニ送付スヘシ

第十三條　大藏大臣仕拂豫算若クハ其更定計算書ノ送付ヲ受ケタルトキハ之ヲ金庫ニ令達スヘシ

第四款　歲入歲出現計書

第十四條　會計法第六條ニ揭クル歲入歲出現計書ハ大藏省ニ備ヘタル主計簿ニ據リ大藏大臣之ヲ調製スヘシ

第十五條　歲入歲出現計書ニハ總豫算ニ定メタル區分ニ從ヒ其年三月三十一日ヲ以テ終リタル年度ニ屬スル歲入歲出ノ八月三十一日ニ於ケル左ノ事項ノ現計ヲ示スヘシ

歲入ノ部

歲入豫算額

調定濟歲入額

收入濟歲入額

不納缺損額

收入未濟歲入額

歳出ノ部
歳出豫算額
豫算決定後増加歳出額
仕拂命令濟歳出額
翌年度繰越額
歳出殘額

第五款　豫備金支出

第十六條　豫備金ハ大藏大臣之ヲ管理ス

第十七條　豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途及豫備金ヲ以テ支辨スル費途ノ金額ハ他ノ費途ニ流用スルコトヲ得ス

第十八條　第一豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途ハ毎年度豫メ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條　各省大臣第一豫備金ノ支出ヲ要スルトキハ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作リ大藏大臣ノ承認ヲ經ヘシ

第二十條　大藏大臣第一豫備金ノ支出ヲ承認シタルトキハ之ヲ會計檢査院ニ通知スヘシ

第二十一條　各省大臣第二豫備金ノ支出ヲ要スルトキハ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作リ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第二十二條　大藏大臣ハ前條ノ計算書ヲ調査シ其意見ヲ付シテ勅裁ヲ請フヘシ

第二十三條　第二豫備金支出ノ勅裁アリタルトキハ大藏大臣其事故金額ヲ會計檢査院ニ通知シ及官報ニ掲載スヘシ

第二十四條　豫備金ヲ以テ補充支辨シタル金額ハ各省大臣其計算書ヲ作リ各費途毎ニ説明ヲ付シ年度經過後五箇月以内ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ
大藏大臣ハ豫備金支出ヲ第一豫備金支出ト第二豫備金支出トニ大別シ其總計算書ヲ作リ之ニ説明ヲ付シ各省大臣ヨリ送付シタル豫備金支出ノ計算書ト共ニ帝國議會ニ提出スルノ手續ヲ爲スヘシ

第三章　收入

第二十五條　收入官吏租税其他ノ收入金ヲ領收スルトキハ其領收證ヲ納入ニ交付シ領收濟ノ旨ヲ歳入ヲ徴收スル官吏ニ報告スヘシ

第二十六條　收入官吏ハ大藏大臣定ムル所ノ規則ニ從ヒ每月一回若クハ數回其領收シタル金額ヲ金庫ニ拂込ムヘシ但金庫ノ設ナキ運輸通信ノ不便ナル地方ニ在ル收入官吏ノ領收シタル金額ハ該官吏之ヲ保管シ大藏大臣ノ指定ニ從ヒ金庫ニ拂込ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十七條　金庫ハ收入官吏又ハ納人ヨリ租稅其他ノ收入金ヲ領收スルトキハ其領收證ヲ拂込人又ハ納人ニ交付シ領收濟ノ旨ヲ歲入ヲ徵收スル官吏ニ通知スヘシ

第二十八條（削除）

第二十九條（削除）

第三十條　歲入ヲ徵收スル官吏ハ其徵收簿ノ結果ニ據リ每月徵收報告書ヲ調製シ參照書類ヲ添ヘ各省大臣ノ定メタル期限ニ之ヲ其事務管理廳ニ送付スヘシ

第三十一條　歲入ノ事務管理廳ハ前條ノ徵收報告書ニ據リ每月徵收總報告書ヲ作リ之ニ必要ナル參照書類ヲ添ヘ其翌月中ニ大藏大臣ニ送付スヘシ

第三十一條ノ二　納期ノ一定シタル收入ニシテ納期所屬ノ年度ニ於テ納額告知書ヲ發セサルモノハ總テ納額告知書ヲ發シタル年度ノ歲入ニ編入スヘシ

第四章　支出

第一款　仕拂命令

第三十二條　仕拂命令官ハ總テ仕拂命令ヲ發スル前其經費ハ正當ニシテ必要ナルヤヲ調査シ該經費ノ金額ヲ算定シ又該經費ハ仕拂豫算額ニ超過スルコトナキヤ支出科目及所屬年度ヲ誤ルコトナキヤ該經費ハ豫算ヲ以テ定メラレタル目的ニ違フコトナキヤヲ調査スヘシ

第三十三條　仕拂命令ニハ債主若クハ其代理人ノ氏名、仕拂フヘキ金額、支出科目、年度、番號ヲ記載スヘシ但支出科目ノ同一ナルモノハ數人ノ債主ニ對シ集合仕拂命令ヲ發シ別ニ各債主ノ金額氏名表ヲ添ユルコトヲ得

現金前渡ノ仕拂命令ニハ前渡ヲ受クヘキ官吏ノ資格、氏名（銀行ナレハ其名稱）前渡ヲ爲スヘキ金額、支出科目、年度及番號ヲ記載スヘシ

第三十四條　仕拂命令ハ一項每ニ之ヲ發スヘシ

第三十五條　仕拂命令官第三十二條ノ調査ヲ了シタルトキハ其仕拂命令ヲ受取人

ニ交付スヘシ但數人ノ債主ニ對スル集合仕拂命令及仕拂命令ヲ當テタル金庫所在地外ニ在ル債主ニ仕拂ヲ要スルモノハ直ニ仕拂命令ヲ金庫ニ送付シ受取人ニ仕拂ノ手續ヲ爲スヘシ

第三十六條　仕拂命令官前條ニ據リ仕拂命令ヲ受取人ニ交付セントスルトキハ前以テ案內仕拂命令ヲ金庫ニ送付スヘシ

第三十七條　（削除）

第三十八條　（削除）

第三十九條　現金前渡ノ仕拂命令ハ左ノ區分ニ從ヒ之ヲ發スヘシ

第一　常時ノ費用ニ係ルモノハ毎一箇月分ノ費額ヲ豫定シテ仕拂命令ヲ發スヘシ但在外各廳ノ經費外國ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費運輸通信ノ不便ナル內國ノ地方ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費其他仕拂場所ノ一定セサル經費ハ事務ノ必要ニ由リ二箇月以上六箇月分マテ合セテ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得

第二　隨時ノ費用ニ係ルモノハ所要ノ費額ヲ豫定シテ事務上差支ナキ限リハ成ルヘク分割シテ仕拂命令ヲ發スヘシ

第三　各廳ニ於テ直接ニ從事スル工事ノ經費ハ工事ノ大小ニ由リ其所要ヲ量リ六千圓以內ニ於テ仕拂命令ヲ發スヘシ

第四十條　會計法第十五條第八ニ據リ現金前渡ヲ爲シタルトキハ左ノ場合ヲ除クノ外更ニ同一ノ主任官吏ニ現金前渡ヲ爲スタメ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得ス

第一　前ニ發シタル仕拂命令ノ金額三分ノ二以上ノ仕拂濟證明アリタルトキ

但此場合ニ於テハ更ニ發スル仕拂命令ノ金額ト前ニ發シタル仕拂命令ノ仕拂濟證明未濟ノ金額ト合シテ六千圓ヲ超ルコトヲ得ス

第二　前ニ發シタル仕拂命令ノ金額六千圓未滿ニシテ更ニ發スル仕拂命令ノ金額ト合シテ六千圓ヲ超サルトキ

第四十一條　現金前渡ヲ受ケタル官吏監督ノ規則ハ大藏大臣各省大臣ニ協議シテ之ヲ定ムヘシ

第四十二條　會計法第十五條ニ據リ政府ノ命シタル銀行ニ委任シテ現金仕拂ヲ爲サシムル爲メニ發スル現金前渡ノ仕拂命令ハ國債元利金仕拂ノ場合ニ限ル

第四十三條　仕拂命令ハ所屬年度經過後滿五箇年內ハ仕拂ノ請求アル毎ニ金庫ニ

於テ仕拂フモノトス

第四十四條　各年度ニ屬スル經費ヲ精算シテ仕拂命令ヲ發スルハ翌年度五月三十一日限リトス

第二款　仕拂命令ノ執行

第四十五條　金庫ハ案内仕拂命令集合仕拂命令若クハ金庫所在地外ニ在ル債主ニ仕拂ヲ要スル仕拂命令ヲ受ケタルトキ其命令合式ニシテ且仕拂豫算各項ノ金額ニ超過セサルトキハ仕拂ヲ爲スヘシ

金庫ニ於テハ休日ヲ除クノ外毎日其開庫時間内ハ何時ニテモ仕拂命令持參人ニ仕拂命令ト引替ニテ現金ヲ交付スヘシ但集合仕拂命令、金庫所在地外ニ在ル債主ニ仕拂ヲ要スル仕拂命令ニ對シテハ領收證書ト引替ニ現金ヲ交付スヘシ

第四十六條　左ノ場合ニ於テハ事由ヲ仕拂命令持參人ニ告ケ金庫ニ於テ仕拂命令ノ執行ヲ拒ムヘシ

第一　案内仕拂命令ノ到著セサルトキ

第二　仕拂命令ト案内仕拂命令ト符合セサルトキ

第三　仕拂命令汚損シ案内仕拂命令ト照合シ難キトキ

第四十七條　各年度ノ仕拂命令ニシテ翌年度六月三十日マテニ仕拂ノ請求ナキ仕拂命令濟金額ニ相當スル資金ハ會計法第二十條ノ歳計剩餘ニ組入レス國庫ニ於テ繰越整理スヘシ

第四十八條　前條ノ資金中年度經過後滿五箇年内ニ仕拂ノ請求ナクシテ會計法第十八條ノ期滿免除ニ據リ政府カ負債ノ義務ヲ免レタルモノアルカ爲メ不用トナリタルモノハ其負債ノ期滿免除トナリタル年度ノ歳入ニ組入ルヘシ

第三款　計算報告

第四十九條　金庫出納役ハ毎月仕拂命令受領濟額報告書ヲ調製シ其翌月中ニ大藏省ニ送付スヘシ但運輸不便ノ土地若クハ遠隔ノ地方ニシテ本文期限ニ據リ難キモノハ豫メ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第五十條　（削除）

第五章　決算

第一款　總決算

第五十一條 歳入歳出總決算ハ總豫算ト同一ノ區分ニ據リ大藏大臣之ヲ調製スヘシ

第二款 各省決算報告書及收入支出計算書

第五十二條 各省大臣ハ翌年度十一月三十日マテニ各省豫定經費要求書ト同一ノ區分ニ據リ其省所管ニ屬スル經費ノ決算報告書ヲ調製シ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

歳入ヲ徵收スル官吏ハ會計檢査院ニ證明ノ爲メ每年度歳入徵收額計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ其歳入事務管理廳ニ送付シ歳入事務管理廳ハ之ヲ會計檢査院ニ送付スヘシ

仕拂命令官ハ會計檢査院ニ證明ノ爲メ每月支出ノ計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ其主管大臣ニ送付シ主管大臣ハ之ヲ會計檢査院ニ送付スヘシ

本條第二項第三項ノ場合ニ於テ歳入歳出ニ關スル計算書ハ特ニ監督ノ任アル官吏若クハ特ニ主管大臣ヨリ委任ヲ受ケタル官吏ヨリ直ニ會計檢査院ニ送付セシムルコトヲ得

第三款 國債計算書

第五十三條 國債計算書ハ大藏大臣之ヲ調製スヘシ

第五十四條 國債計算書ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一 當該年度末日ニ於ケル國債ノ種類及現高ヲ示ス所ノ計算

第二 當該年度ニ於テ償還シ及仕拂ヒタル各種國債ノ元高及利子ノ計算

第三 最近五箇年度間ニ於ケル各種國債增減ノ形況ヲ示ス所ノ計算

第四款 特別會計計算書

第五十五條 特別會計計算書ハ會計法第三十條ニ據リ特別ノ會計ヲ立ルコトヲ許サレタル事務ヲ管理スル所ノ各省大臣之ヲ調製シ每年度經過後五箇月以內ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第五十六條 特別會計計算書ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一 收入計算

第二 支出計算

第三 最近五箇年度間資金ノ增減

第四　最近五箇年度間損益ノ比較

第六章　定額繰越、過年度支出、定額戻入

第一款　定額繰越

第五十七條　各省大臣會計法第二十一條及第二十二條ニ據リ定額ノ繰越ヲ要スルトキハ翌年度五月三十一日迄ニ繰越計算書ヲ作リ大藏大臣ノ承認ヲ求ムヘシ

本條繰越計算書ハ歳出豫算ノ區分ニ從ヒ調製シ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一　繰越ヲ要スル項ノ定額

第二　右定額ニ對シ既ニ仕拂命令濟トナリタル額及當該年度所屬トシテ仕拂命令ヲ發スヘキ額

第三　右定額ニ對シ支拂命令ヲ發スヘキ額即チ翌年度ニ繰越ヲ要スル額

第四　右定額中全ク不用ニ歸シ決算ニ於テ取消スヘキ額

第五十八條　會計法第二十一條ニ據リ年度内ニ其經費ノ支出ヲ終ラサリシ金額ヲ翌年度ニ繰越サントスルトキハ其繰越サントスル金額ノ計算書ニ各事件毎ニ竣功遲延ノ事由ヲ示シ又請負ニテ爲サシムル工事若クハ製造ナレハ竣功遲延ノ事由ノ外ニ請負人職業住所氏名ヲ示シ契約書ノ寫ヲ添ユヘシ

第五十九條　大藏大臣各省定額ノ繰越ヲ承認シタルトキハ之ヲ會計檢査院ニ通知スヘシ

第二款　過年度支出

第六十條　過年度ニ屬スル經費ノ支出ヲ爲ストキハ現年度各省定額ニ對シ仕拂命令ヲ發スヘシ

第六十一條　（削除）

第六十二條　第六十條ニ據リ支出セントスル經費ノ金額ハ豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキモノヽ外其經費所屬年度ノ豫算ニ於テ該經費ノ屬スル毎項定額中不用トナリタル金額ヲ超過スヘカラス

第三款　定額戻入

第六十三條　仕拂命令官會計法第二十三條但書ニ據リ定額ノ戻入ヲ爲サントスルトキハ其旨ヲ金庫ニ通知スヘシ

第六十四條　金庫ハ定額ニ戻入ヲ爲シタルトキハ其旨ヲ仕拂命令官ニ通知スヘシ

第六十五條　各年度ニ屬スル定額戻入ヲ爲スハ翌年度五月三十一日ヲ過クルコトヲ得ス

第六十六條　（削除）

第七章　政府ノ工事及物件ノ賣買貸借

第一款　總則

第六十七條　各省大臣千圓以上ノ工事ニ付テハ竣功ノ後其工事ヲ監督シタル官吏又ハ技術者ヲシテ之カ調書ヲ作ラシムヘシ

契約ニ據リ工事ノ既濟部分又ハ物品ノ既納部分ニ對シ完濟前ニ代價ノ一部分ヲ仕拂ハントスルトキハ各省大臣ハ特ニ檢査ノ官吏ヲ命シテ事實ヲ調定シ其調書ヲ作ラシムヘシ

仕拂命令官ハ前各項ノ調書ニ據ルニアラサレハ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得ス

第六十八條　前條第二項ノ支拂ヲ爲サントスルトキハ工事ニ付テハ其既濟部分ニ對スル代價ノ十分ノ九物品ニ付テハ其既納部分ニ對スル代價ヲ超ユヘカラス但箇々ニ分立シ得ヘキ性質ノ工事ニ於ケル各箇ノ完濟部分ニ對シテハ其代價ノ全額マテヲ仕拂フコトヲ得

第六十九條　工事又ハ物品供給ノ競爭ニ加ハラントシ若クハ其契約ヲ結ハントスル者ハ其工事又ハ物品ノ供給ニ二年以來從事スルコトヲ證明スヘシ

各省大臣ハ工事又ハ物品ノ性質ニ依リ必要アルトキハ前項ノ外特ニ省令ヲ以テ其競爭者ノ資格ヲ定ムルコトヲ得

工事又ハ物品賣買ノ競爭ニ加ハラントシ若クハ其契約ヲ結ハントスル者ハ現金又ハ公債證書ヲ以テ保證金ヲ納ムヘシ

第六十九條ノ二　各省大臣ニ於テ左ノ各號ノ一ニ該當スト認メタル者ハ爾後二箇年間工事又ハ物品賣買ノ競爭ニ加ハルコトヲ得ス其之ヲ代理人支配人番頭又ハ手代トシテ使用シタル者亦同シ

一、工事又ハ物品供給ノ契約ヲ履行スルニ當リ故意ニ工事又ハ物品ヲ粗雜ニシタル者

一、競爭ニ際シ漫ニ價格ヲ競上ケ若クハ競下クルノ目的ヲ以テ連合ヲ爲シタル者

一、競爭ノ加入ヲ妨害シ若クハ競落者ノ契約履行ヲ妨害シタル者

一、工事又ハ物品ノ檢査監督ニ際シ掛員ノ職務執行ヲ妨ケタル者

一、前各號ニ該當スト認メラレタル後二箇年ヲ經過セサル者ヲ工事請負又ハ物品賣買ニ際シ代理人支配人番頭又ハ手代トシテ使用スル者

第六十九條ノ三　前條ニ該當シタル者ヲ入札代理人トシテ使用スル者ハ競爭ニ加ハルコトヲ得ス

第七十條　前條ノ保證金ハ左ノ制限ニ據リ各省大臣之ヲ定ムヘシ

第一　競爭ニ加ハラントスル者ハ其事項ノ見積代金ノ百分ノ五以上

第二　契約ヲ結ハントスル者ハ其事項ノ代金ノ百分ノ十以上

第七十一條　競爭ノ落札者請負又ハ賣買ノ契約ヲ結ハサルトキハ其保證金ハ政府ノ所得トス

第二款　競爭契約

第七十二條　競爭ハ總テ入札ノ方法ヲ以テ之ヲ行フヘシ

第七十三條　入札ノ方法ヲ以テ工事又ハ物件ノ賣買貸借ヲ契約セントスルトキハ其入札期日ヨリ少ナクモ十五日以前ヨリ揭示又ハ官報新聞紙其他ノ方法ヲ以テ成ルヘク廣ク公告スヘシ但シ要急ノ場合ニ於テハ公告期間ヲ七日迄ニ短縮スルコトヲ得

第七十四條　前條ノ公告ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一　競爭入札ニ付スル事項

第二　契約書案ヲ示ス場所及其契約ノ取結ヲ擔任スル官吏ノ官氏名

第三　競爭執行ノ場所日限及時刻

第四　入札ノ保證金額

第七十五條　各省大臣若クハ其委任ヲ受ケタル官吏ハ其競爭入札ニ付シタル工事又ハ物件ノ價格ヲ豫定シ其豫定價格ヲ封書トシ開札ノトキ之ヲ開札場所ニ置クヘシ

第七十六條　開札ハ公告ニ示シタル場所日限時刻ニ入札人ノ面前ニ於テ之ヲ行フヘシ但入札人出席セサルカ又ハ出席セサル者アルトキハ入札ニ關係ナキ官吏ヲシテ開札ニ立會ハシムヘシ

入札人ハ一旦提出シタル入札書ノ引換變更又ハ取消ヲ爲スコトヲ得ス

競爭加入ノ資格ナクシテ爲シタル者ノ入札ハ無效トス

第七十七條　開札ノ上ニテ各人ノ入札中一モ第七十五條ニ據リ豫定シタル價格ノ制限ニ達セサルトキハ直ニ出席入札人ヲシテ再度ノ入札ヲ爲サシムルコトヲ得

第七十八條　落札トナルヘキ同價ノ入札ヲ爲シタル者數名アルトキハ直ニ抽籤ヲ以テ落札人ヲ定ムヘシ

第七十九條　競爭ノ落札者請負又ハ賣買貸借ノ契約ヲ結ハサルトキハ更ニ競爭ヲ行フヘシ但本條ノ場合ニ於テハ第七十三條ノ期限ヲ七日マテニ短縮スルコトヲ得

第八十條　工事及物件ノ賣買貸借契約書ニハ其契約セントスル事項ノ細密ナル設計、仕譯、落成期限、受渡期限、保證金額、契約違背ノトキ保證金ニ對スル處分、其他一切必要ナル條件ヲ掲クヘシ

第八十一條　契約ハ各省大臣若クハ特ニ其委任ヲ受ケタル官吏其契約書ニ署名捺印スルニアラサレハ確定セサルモノトス

第三款　隨意契約

第八十二條　隨意契約書ハ第八十條及第八十一條ニ準據シ之ヲ作ルヘシ但一口千圓未滿ノ隨意契約ノ場合ニ於テハ本文ノ契約書ヲ省略スルコトヲ得

第八十三條　隨意契約ノ場合ニ於テハ各省大臣ノ見込ニヨリ第六十九條ノ規定ニ據ラサルコトヲ得

第八章　出納官吏

第一款　收入官吏、現金前渡ヲ受ケタル官吏

第八十四條　出納官吏ハ其責任ニ屬スル會計ニ付自身ニ事務ヲ執ラサルヲ理由トシテ其責任ヲ免ルコトヲ得ス但各省大臣ノ命令ヲ以テ特ニ其代理官若クハ分任官ヲ定メタルトキ其代理官若クハ分任官ノ所爲ニ付テハ本條ノ限ニアラス

前項代理官ハ出納官吏ノ事務ノ全部ヲ代理シ分任官ハ其一部ヲ分掌スルモノトス

第八十五條　各省大臣ノ命シタル出納官吏代理官若クハ分任官ハ其所爲ニ付會計法第二十六條ノ責任ヲ免ルコトヲ得ス

第八十六條　出納官吏ハ現金前渡及現金收入ニ關シ大藏大臣ノ指揮監督ヲ受ク

第八十七條　（削除）

第八十八條　各省大臣ハ所屬出納官吏ノ所爲ニ由リ政府ノ損失ヲ生シタリト認ムル場合ニ於テハ會計檢査院ノ判決以前ト雖モ其出納官吏ニ向テ辨償ヲ命スルコトヲ得

第八十九條　前條ノ場合ニ於テ其辨償ヲ命セラレタル出納官吏負擔ノ責ヲ免ルヘキ理由アリト信スルトキハ計算書ヲ作リ證憑書類ヲ添ヘ本屬大臣ヲ經由シテ之ヲ會計檢査院ニ送付シ其判決ヲ求ムルコトヲ得

各省大臣ハ前項ノ場合ト雖モ其命シタル損失金ノ辨償ヲ猶豫セス

會計檢査院ニ於テ其出納官吏ニ向テ辨償ノ責ナシト判決シタルトキハ其既納ニ係ル辨償金ハ直ニ之ヲ還付ス

第九十條　（削除）

第九十一條　收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ハ毎年三月三十一日若クハ該官吏轉停免死亡職ノトキ本屬大臣檢査員ヲ命シテ之ヲ檢査セシムヘシ

但臨時ニ現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ハ定時ノ檢査ヲ要セス

大藏大臣又ハ各省大臣ハ必要ト認ムルトキハ臨時ニ檢査員ヲ命シテ收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ヲ檢査セシムルコトアルヘシ

第九十二條　前條ノ檢査ヲ執行スルニ當リ主務ノ出納官吏事故ニ由リ自身檢査ヲ受クル能ハサルトキハ其代理者若クハ特ニ本屬大臣ノ命シタル官吏ニ於テ立會ヲ爲スヘシ

第九十三條　收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ヲ檢査シタルトキハ其檢定書二通ヲ製シ檢査員及主務ノ出納官吏若クハ立會人之ニ署名シ一通ハ該官吏若クハ立會人ニ交付シ一通ハ本屬大臣ニ提出スヘシ

第九十四條　收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏他ノ公金ノ出納ヲ兼掌スルトキハ別ニ檢査ノ方法アルニ拘ハラス金櫃ノ檢査ヲ執行スル場合ニ於テハ他ノ公金ヲ併セテ檢査ヲ行フヘシ

第九十五條　（削除）

第九十六條　（削除）

第九十七條　收入官吏ハ會計檢査院ノ檢査判決ヲ受クル爲メ一年度內ニ執行シタル出納ノ計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ歲入ヲ徵收スル官吏ニ送付シ歲入ヲ徵收スル官吏ハ其下檢査ヲ執行シ下檢査書ヲ添ヘ之ヲ會計檢査院ニ送付スヘシ

第九十八條　現金前渡ヲ受ケタル官吏ハ會計檢査院ノ檢査判決ヲ受クル爲メ每月仕拂計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ仕拂命令官ニ送付シ仕拂命令官ハ其下檢査ヲ執行シ下檢査書ヲ添ヘ之ヲ會計檢査院ニ送付スヘシ但行軍費航海費ノ如キハ行軍若クハ航海ノ終リタルトキ本條ノ手續ヲ爲スコトヲ得

九十八條ノ二　分任出納官吏ノ出納ハ總テ主任出納官吏ノ計算トシテ取扱ヒ其報告書及計算書ハ各別ニ提出ヲ要セス但各省大臣若クハ會計檢査院ニ於テ必要ト認ムルトキハ特ニ分任出納官吏ヲシテ報告書又ハ計算書ヲ提出セシムルコトアルヘシ

第九十九條　出納官吏交替ヲ爲シタルトキハ其在職期限間ニ執行シタル會計ノ計算書ヲ調製シ第九十七條第九十八條ノ手續ヲ爲スヘシ

第百條　出納官吏死亡其他ノ事故ニ由リ自身ニ計算書ヲ調製スル能ハサルトキハ各省大臣特ニ命シタル官吏ヲシテ之ヲ調製セシムヘシ

出納官吏定期內ニ計算書ヲ送付セサルトキハ各省大臣ハ他ノ官吏ニ命シテ之ヲ調製セシムヘシ

本條ニ據リ調製シタル計算書ハ出納官吏ノ自身ニ調製シタルモノト見做シ會計檢査院ニ於テ檢査判決ヲ爲スヘシ

第百一條　出納官吏ノ計算書ハ提出ノ後修正變更スルコトヲ得ス

第百二條　會計法第二十八條ニ據リ出納官吏ノ納ムヘキ身元保證金額ハ各省大臣之ヲ定メ會計檢査院ニ通知スヘシ

出納官吏相當ノ資産アル者二人以上ヲ以テ保證人ト爲ストキハ各省大臣前項ノ身元保證金ノ全部若クハ一部ヲ免除スルコトヲ得此場合ニ於テハ各省大臣ヨリ其保證人ノ住所氏名職業ヲ會計檢査院ニ通知スヘシ但保證人ノ責任ハ免除シタル保證金額ニ止ルモノトス

第百三條　身元保證金ハ現金ヲ以テ納ムヘシ但公債證書若クハ土地ヲ以テ現金ニ代用スルコトヲ得

第百四條　身元保證ノ現金ハ大藏省預金局通常預金ノ利子ヲ付スヘシ

身元保證ニ供スル公債證書若クハ土地ハ出納官吏ヨリ各省大臣若クハ各省大臣ノ指定シタル官吏ニ書入トシ其土地ハ出納官吏ノ私費ヲ以テ登記ヲ受クヘシ

第百五條　會計檢査院ノ判決ニ依リ各省大臣出納官吏ノ損失金辨償ヲ命シタル場合ニ於テ其指定シタル期限内ニ出納官吏ヨリ損失金ノ辨償ヲ爲サヽルトキハ其身元保證金ヲ以テ辨償ニ充ツヘシ

前項ノ場合ニ於テ身元保證金ニ代用シタル公債證書若クハ土地ハ各省大臣之ヲ公賣ニ付シ其代價ヨリ公賣ニ關スル費用及損失金額ヲ差引シ剩餘アルトキハ出納官吏ニ返付スヘシ

保證人ヲ以テ身元保證金ノ免除ヲ得タル官吏損失金ノ辨償ヲ命セラレタル場合ニ於テ辨償スルコト能ハサルトキハ其保證人ヲシテ損失金ヲ辨償セシムヘシ

第百六條　前條ノ場合ニ於テ出納官吏ノ身元保證金ヲ以テ損失金ノ辨償ニ充ルニ足ラサルトキハ其不足ハ出納官吏ヨリ徵收スヘ

第百七條　出納官吏數職ヲ兼務シタルカ爲メ各職每ニ身元保證ヲ爲シタルトキト雖モ身元保證金ハ出納官吏ノ責任其何職ヲ行ヒタルヨリ生シタルヲ問ハス流用シテ辨償ニ充ツヘシ

第百八條　（削除）

第百九條　（削除）

第百十條　出納官吏ノ身元保證金ハ其解職後會計檢査院ニ於テ其官吏ノ執行シタル會計事務ニ付責任解除ヲ與ヘタル後ニ非サレハ之ヲ還付セス

第二款　金庫出納役

第百十一條　會計法第三十一條ニ據リ國庫金ノ取扱ヲ日本銀行ニ命シタル場合ニ於テハ日本銀行總裁ハ金庫出納役トシテ金庫ノ出納ヲ掌ルヘシ

金庫出納役ハ會計檢査院ノ檢査判決ヲ受クル爲メ一年度內ニ執行シタル出納ノ計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

金庫出納役ハ會計檢査院ノ檢査ヲ受クル爲メ每月各金庫出納內譯書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ大藏大臣ニ送付スヘシ

大藏大臣ハ前各項ノ出納計算書及內譯書ヲ調査シ之ヲ會計檢査院ニ送付スヘシ

第九章 帳簿

第百十二條 大藏省ハ日記簿原簿補助簿ヲ備ヘ國庫ノ計算ニ入ルヘキ一切現金ノ出納ヲ登記スヘシ

第百十三條 大藏省ハ歳入歳出ノ主計簿ヲ備ヘ總テ歳入ノ豫算額、調定濟額、收入濟額、不納缺損額、收入未濟額、歳出ノ豫算額、豫算決定後增加額、仕拂命令濟額、翌年度繰越額、殘額ヲ登記スヘシ

第百十四條 歳入ヲ徴收スル官吏ハ徴收簿ヲ備ヘ歳入ノ種類ヲ區分シ調定濟額、收入濟額、不納缺損額、收入未濟額ヲ登記スヘシ

第百十五條 歳入ノ事務管理廳ハ歳入簿ヲ備ヘ歳入ノ種類ヲ區分シ歳入ノ豫算額、調定濟額、收入濟額、不納缺損額、收入未濟額ヲ登記スヘシ

第百十六條 金庫出納役ハ支出簿ヲ備ヘ歳出ノ科目ヲ區分シ仕拂豫算額、仕拂命令受領濟額ヲ登記スヘシ

第百十七條 (削除)

第百十八條 收入官吏、現金前渡ヲ受ケタル官吏及金庫出納役ハ現金出納簿ヲ備ヘ現金ノ出納ヲ登記スヘシ

第百十九條 各年度經過後七箇月ノ末日ニ於テ大藏大臣ハ會計檢査官立會ノ上ニテ大藏省ニ備ヘタル主計簿ヲ締切ルヘシ

第十章 雜則

第百二十條 本規則ニ據リ當該官吏及金庫出納役ヨリ會計檢査院ニ提出スル所ノ證明書ニ關スル規程樣式ハ會計檢査院ニ於テ之ヲ定ムヘシ

第百二十一條 前條ノ外本規則ニ掲クル諸計算書仕拂命令領收證ノ樣式ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ

第百二十二條 帳簿ノ樣式及記入ノ方法ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ

第百二十三條 本規則ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

本規則ト牴觸スル命令ハ本規則施行ノ日ヨリ總テ廢止ス

法例（明治三十一年六月二十一日 法律第十號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル法例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法例別册ノ通之ヲ定ム

此法律施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（三十一年勅令第百二十三號ヲ以テ同年七月十六日ヨリ施行ス）

明治二十三年法律第九十七號法例ハ此法律發布ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

（別册）

法例

第一條　法律ハ公布ノ日ヨリ起算シ滿二十日ヲ經テ之ヲ施行ス但法律ヲ以テ之ニ異ナリタル施行時期ヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

臺灣、北海道、沖繩縣其他島地ニ付テハ勅令ヲ以テ特別ノ施行時期ヲ定ムルコトヲ得

第二條　公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反セサル慣習ハ法令ノ規定ニ依リテ認メタル

モノ及ヒ法令ニ規定ナキ事項ニ關スルモノニ限リ法律ト同一ノ效力ヲ有ス

第三條　人ノ能力ハ其本國法ニ依リテ之ヲ定ム

外國人カ日本ニ於テ法律行爲ヲ爲シタル場合ニ於テ其外國人カ本國法ニ依レハ無能力者タルヘキトキト雖モ日本ノ法律ニ依レハ能力者タルヘキトキハ前項ノ規定ニ拘ハラス之ヲ能力者ト看做ス

前項ノ規定ハ親族法又ハ相續法ノ規定ニ依ルヘキ法律行爲及ヒ外國ニ在ル不動産ニ關スル法律行爲ニ付テハ之ヲ適用セス

第四條　禁治産ノ原因ハ禁治産者ノ本國法ニ依リ其宣告ノ效力ハ宣告ヲ爲シタル國ノ法律ニ依ル

日本ニ住所又ハ居所ヲ有スル外國人ニ付キ其本國法ニ依リ禁治産ノ原因アルトキハ裁判所ハ其者ニ對シテ禁治産ノ宣告ヲ爲スコトヲ得但日本ノ法律カ其原因ヲ認メサルトキハ此限ニ在ラス

第五條　前條ノ規定ハ準禁治産ニ之ヲ準用ス

第六條　外國人ノ生死カ分明ナラサル場合ニ於テハ裁判所ハ日本ニ在ル財産及ヒ日本ノ法律ニ依ルヘキ法律關係ニ付テノミ日本ノ法律ニ依リテ失踪ノ宣告ヲ爲スコトヲ得

第七條　法律行爲ノ成立及ヒ效力ニ付テハ當事者ノ意思ニ從ヒ其何レノ國ノ法律ニ依ルヘキカヲ定ム

當事者ノ意思カ分明ナラサルトキハ行爲地法ニ依ル

第八條　法律行爲ノ方式ハ其行爲ノ效力ヲ定ムル法律ニ依ル

行爲地法ニ依リタル方式ハ前項ノ規定ニ拘ハラス之ヲ有效トス但物權其他登記スヘキ權利ヲ設定シ又ハ處分スル法律行爲ニ付テハ此限ニ在ラス

第九條　法律ヲ異ニスル地ニ在ル者ニ對シテ爲シタル意思表示ニ付テハ其通知ヲ發シタル地ヲ行爲地ト看做ス

契約ノ成立及ヒ效力ニ付テハ申込ノ通知ヲ發シタル地ヲ行爲地ト看做ス若シ其申込ヲ受ケタル者カ承諾ヲ爲シタル當時申込ノ發信地ヲ知ラサリシトキハ申込者ノ住所地ヲ行爲地ト看做ス

第十條　動産及ヒ不動産ニ關スル物權其他登記スヘキ權利ハ其目的物ノ所在地法

ニ依ル

前項ニ掲ケタル權利ノ得喪ハ其原因タル事實ノ完成シタル當時ニ於ケル目的物ノ所在地法ニ依ル

第十一條　事務管理、不當利得又ハ不法行爲ニ因リテ生スル債權ノ成立及ヒ效力ハ其原因タル事實ノ發生シタル地ノ法律ニ依ル

前項ノ規定ハ不法行爲ニ付テハ外國ニ於テ發生シタル事實カ日本ノ法律ニ依レハ不法ナラサルトキハ之ヲ適用セス

外國ニ於テ發生シタル事實カ日本ノ法律ニ依リテ不法ナルトキト雖モ被害者ハ日本ノ法律カ認メタル損害賠償其他ノ處分ニ非サレハ之ヲ請求スルコトヲ得ス

第十二條　債權讓渡ノ第三者ニ對スル效力ハ債務者ノ住所地法ニ依ル

第十三條　婚姻成立ノ要件ハ各當事者ニ付キ其本國法ニ依リテ之ヲ定ム但其方式ハ婚姻擧行地ノ法律ニ依ル

前項ノ規定ハ民法第七百七十七條ノ適用ヲ妨ケス

第十四條　婚姻ノ效力ハ夫ノ本國法ニ依ル

外國人カ女戸主ト入夫婚姻ヲ爲シ又ハ日本人ノ壻養子ト爲リタル場合ニ於テハ婚姻ノ效力ハ日本ノ法律ニ依ル

第十五條　夫婦財產制ハ婚姻ノ當時ニ於ケル夫ノ本國法ニ依ル

外國人カ女戸主ト入夫婚姻ヲ爲シ又ハ日本人ノ壻養子ト爲リタル場合ニ於テハ夫婦財產制ハ日本ノ法律ニ依ル

第十六條　離婚ハ其原因タル事實ノ發生シタル時ニ於ケル夫ノ本國法ニ依ル但裁判所ハ其原因タル事實カ日本ノ法律ニ依ルモ離婚ノ原因タルトキニ非サレハ離婚ノ宣告ヲ爲スコトヲ得ス

第十七條　子ノ嫡出ナルヤ否ヤハ其出生ノ當時母ノ夫ノ屬シタル國ノ法律ニ依リテ之ヲ定ム若シ其夫カ子ノ出生前ニ死亡シタルトキハ其最後ニ屬シタル國ノ法律ニ依リテ之ヲ定ム

第十八條　私生子認知ノ要件ハ其父又ハ母ニ關シテハ認知ノ當時父又ハ母ノ屬スル國ノ法律ニ依リ之ヲ定メ其子ニ關シテハ認知ノ當時子ノ屬スル國ノ法律ニ依リテ之ヲ定ム

認知ノ效力ハ父又ハ母ノ本國法ニ依ル

第十九條　養子緣組ノ要件ハ各當事者ニ付キ其本國法ニ依リテ之ヲ定ム

養子緣組ノ效力及ヒ離緣ハ養親ノ本國法ニ依ル

第二十條　親子間ノ法律關係ハ父ノ本國法ニ依ル若シ父アラサルトキハ母ノ本國法ニ依ル

第二十一條　扶養ノ義務ハ扶養義務者ノ本國法ニ依リテ之ヲ定ム

第二十二條　前九條ニ揭ケタルモノノ外親族關係及ヒ之ニ因リテ生スル權利義務ハ當事者ノ本國法ニ依リテ之ヲ定ム

第二十三條　後見ハ被後見人ノ本國法ニ依ル

日本ニ住所又ハ居所ヲ有スル外國人ノ後見ハ其本國法ニ依レハ後見開始ノ原因アルモ後見ノ事務ヲ行フ者ナキトキ及ヒ日本ニ於テ禁治產ノ宣告アリタルトキニ限リ日本ノ法律ニ依ル

第二十四條　前條ノ規定ハ保佐ニ之ヲ準用ス

第二十五條　相續ハ被相續人ノ本國法ニ依ル

第二十六條　遺言ノ成立及ヒ效力ハ其成立ノ當時ニ於ケル遺言者ノ本國法ニ依ル

遺言ノ取消ハ其當時ニ於ケル遺言者ノ本國法ニ依ル

前二項ノ規定ハ遺言ノ方式ニ付キ行爲地法ニ依ルコトヲ妨ケス

第二十七條　當事者ノ本國法ニ依ルヘキ場合ニ於テ其當事者カ二箇以上ノ國籍ヲ有スルトキハ最後ニ取得シタル國籍ニ依リテ其本國法ヲ定ム但其一カ日本ノ國籍ナルトキハ日本ノ法律ニ依ル

國籍ヲ有セサル者ニ付テハ其住所地法ヲ以テ本國法ト看做ス其住所カ知レサルトキハ其居所地法ニ依ル

地方ニ依リ法律ヲ異ニスル國ノ人民ニ付テハ其者ノ屬スル地方ノ法律ニ依ル

第二十八條　當事者ノ住所地法ニ依ルヘキ場合ニ於テ其住所カ知レサルトキハ其居所地法ニ依ル

前條第一項及ヒ第三項ノ規定ハ當事者ノ住所地法ニ依ルヘキ場合ニ之ヲ準用ス

第二十九條　當事者ノ本國法ニ依ルヘキ場合ニ於テ其國ノ法律ニ從ヒ日本ノ法律

ニ依ルヘキトキハ日本ノ法律ニ依ル

第三十條　外國法ニ依ルヘキ場合ニ於テ其規定カ公ノ秩序又ハ善良ノ風俗ニ反スルトキハ之ヲ適用セス

外國人ノ署名捺印及無資力證明ニ關スル件

（明治三十二年三月十日法律第五十號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル外國人ノ署名捺印及無資力證明ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　法令ノ規定ニ依リ署名、捺印スヘキ場合ニ於テハ外國人ハ署名スルヲ以テ足ル

捺印ノミヲ爲スヘキ場合ニ於テハ外國人ハ署名ヲ以テ捺印ニ代フルコトヲ得

第二條　民事訴訟法第九十二條ニ依リ訴訟上ノ救助ヲ求ムル外國人ハ日本ニ住所、居所ヲ有セサルトキハ其ノ住所又ハ居所アル外國ノ管轄官廳ノ證明書ヲ以テ同法第九十三條ニ定メタル無資力ノ證明ヲ爲スコトヲ要ス但シ其ノ證明書ニハ日本ニ駐在スル其ノ外國ノ領事ノ認證ヲ受クヘシ

日本ニ住所又ハ居所ヲ有スル外國人ハ其ノ住所地又ハ居所地ノ市町村長ノ證明書ヲ以テ前項ノ證明ヲ爲スコトヲ要ス但シ市町村長ノ證明書ヲ提出スルコト能ハサルトキ又ハ其ノ證明カ不十分ナルトキハ裁判所ハ日本ニ駐在スル本國領事ノ認證アル本國管轄官廳ノ證明書ヲ提出セシムルコトヲ得

附　則

第三條　本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（三十二年勅令第三百二十七號ヲ以テ同年七月十七日ヨリ施行ス）

公式令

（明治四十年二月一日勅令第六號）

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ公式令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

公式令

第一條　皇室ノ大事ヲ宣誥シ及大權ノ施行ニ關スル勅旨ヲ宣誥スルハ別段ノ形式ニ依ルモノヲ除クノ外詔書ヲ以テス

詔書ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ其ノ皇室ノ大事ニ關スルモノニハ宮内大臣年月日ヲ記入シ内閣總理大臣ト倶ニ之ニ副署ス其ノ大權ノ施行ニ關スルモノニハ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署シ又ハ他ノ國務各大臣ト倶ニ之ニ副署ス

第二條　文書ニ由リ發スル勅旨ニシテ宣誥セサルモノハ別段ノ形式ニ依ルモノヲ除クノ外勅書ヲ以テス

勅書ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ其ノ皇室ノ事務ニ關スルモノニハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス其ノ國務大臣ノ職務ニ關スルモノニハ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス

第三條　帝國憲法ノ改正ハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ樞密顧問ノ諮詢及帝國憲法第七十三條ニ依ル帝國議會ノ議決ヲ經タル旨ヲ記載シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ他ノ國務各大臣ト倶ニ之ニ副署ス

第四條　皇室典範ノ改正ハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ皇族會議及樞密顧問ノ諮詢ヲ經タル旨ヲ記載シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ國務各大臣ト倶ニ之ニ副署ス

第五條　皇室典範ニ基ツク諸規則、宮内官制其ノ他皇室ノ事務ニ關シ勅定ヲ經タル規程ニシテ發表ヲ要スルモノハ皇室令トシ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス國務大臣ノ職務ニ關連スル皇室令ノ上諭ニハ内閣總理大臣又ハ内閣總理大臣及主任ノ國務大臣ト倶ニ之ニ副署ス

皇族會議及樞密顧問又ハ其ノ一方ノ諮詢ヲ經タル皇室令ノ上諭ニハ其ノ旨ヲ記載ス

第六條　法律ハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ帝國議會ノ協贊ヲ經タル旨ヲ記載シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署シ又ハ他ノ國務各大臣若ハ主任ノ國務大臣ト倶ニ之ニ副署ス

樞密顧問ノ諮詢ヲ經タル法律ノ上諭ニハ其ノ旨ヲ記載ス

第七條　勅令ハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ內閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署シ又ハ他ノ國務各大臣若ハ主任ノ國務大臣ト俱ニ之ニ副署ス

樞密顧問ノ諮詢ヲ經タル勅令及貴族院ノ諮詢又ハ議決ヲ經タル勅令ノ上諭ニハ其ノ旨ヲ記載シ帝國憲法第八條第一項又ハ第七十條第一項ニ依リ發スル勅令ノ上諭ニハ其ノ旨ヲ記載ス

帝國議會ニ於テ帝國憲法第八條第一項ノ勅令ヲ承諾セサル場合ニ於テ其ノ效力ヲ失フコトヲ公布スル勅令ノ上諭ニハ同條第二項ニ依ル旨ヲ記載ス

第八條　國際條約ヲ發表スルトキハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ樞密顧問ノ諮詢ヲ經タル旨ヲ記載シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ內閣總理大臣年月日ヲ記入シ主任ノ國務大臣ト俱ニ之ニ副署ス

第九條　豫算及豫算外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スノ件ハ上諭ヲ附シテ之ヲ公布ス

前項ノ上諭ニハ帝國議會ノ協贊ヲ經タル旨ヲ記載シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ內閣總理大臣年月日ヲ記入シ主任ノ國務大臣ト俱ニ之ニ副署ス

第十條　閣令ニハ內閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ署名ス

省令ニハ各省大臣年月日ヲ記入シ之ニ署名ス

宮內省令ニハ宮內大臣年月日ヲ記入シ之ニ署名ス

第十一條　皇室令、勅令、閣令及省令ハ別段ノ施行時期アル場合ノ外公布ノ日ヨリ起算シ滿二十日ヲ經テ之ヲ施行ス

第十二條　前數條ノ公文ヲ公布スルハ官報ヲ以テス

第十三條　國書其ノ他外交上ノ親書、條約批准書、全權委任狀、外國派遣官吏委任狀、名譽領事委任狀及外國領事認可狀ニハ親署ノ後國璽ヲ鈐シ主任ノ國務大臣之ニ副署ス外務大臣ニ授クル全權委任狀ニハ內閣總理大臣之ニ副署ス

第十四條　親任式ヲ以テ任スル官ノ官記ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ內閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス宮內官ニ付テハ宮內大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス

內閣總理大臣ヲ任スルノ官記ニハ他ノ國務大臣又ハ內大臣、宮內大臣ヲ任スルノ官記ニハ內大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス

前二項ニ依ルモノノ外勅任官ノ官記ニハ御璽ヲ鈐シ內閣總理大臣年月日ヲ記入

シ之ヲ奉ス宮内官ニ付テハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス

奏任官ノ官記ニハ内閣ノ印ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ヲ宣ス宮内官ニ付テハ宮内省ノ印ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ宣ス

第十五條　親任式ヲ以テ任シタル官ヲ免スルノ辭令書ニハ御璽ヲ鈐シ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス宮内官ニ付テハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス

内閣總理大臣ヲ免スルノ辭令書ニハ他ノ國務大臣又ハ内大臣、宮内大臣ヲ免スルノ辭令書ニハ内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス

前二項ニ依ルモノノ外勅任官ヲ免スルノ辭令書ニハ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス宮内官ニ付テハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス

奏任官ヲ免スルノ辭令書ニハ内閣總理大臣年月日ヲ記入シ之ヲ宣ス宮内官ニ付テハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ宣ス

第十六條　爵記ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス

第十七條　一位ノ位記ニハ親署ノ後御璽ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署二位以下四位以上ノ位記ニハ御璽ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス五位以下ノ位記ニハ宮内省ノ印ヲ鈐シ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ宣ス

第十八條　爵位ノ返上ヲ命シ又ハ允許スルノ辭令書ニハ宮内大臣年月日ヲ記入シ之ヲ奉ス

第十九條　勳三等功五級以上ノ勳記ニハ親署ノ後國璽ヲ鈐シ勳四等功六級以下ノ勳記ニハ國璽ヲ鈐シ内閣總理大臣旨ヲ奉シ賞勳局總裁ヲシテ年月日ヲ記入シ之ニ署名セシム

勳記ニハ勳章ノ種別ニ從ヒ號數ヲ附シ簿册ニ記入スル旨ヲ附記シ賞勳局ノ印ヲ鈐シ賞勳局書記官之ニ署名ス

第二十條　記章ノ證狀並外國勳章及記章ノ佩用免許ノ證狀ニハ内閣總理大臣旨ヲ奉シ賞勳局總裁ヲシテ年月日ヲ記入シ賞勳局ノ印ヲ鈐シ之ニ署名セシム

證狀ニハ其ノ種別ニ從ヒ號數ヲ附シ簿册ニ記入スル旨ヲ附記シ賞勳局ノ印ヲ鈐シ賞勳局書記官之ニ署名ス

第二十一條　勳章及記章並外國勳章及記章ノ佩用免許ノ證狀ヲ褫奪スルノ辭令書

ニハ内閣總理大臣旨ヲ奉シ賞勳局總裁ヲシテ年月日ヲ記入シ之ニ署名セシム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

公文式ハ之ヲ廢止ス

●軍令ニ關スル件（明治四十年九月十二日 軍令第一號）

朕軍令ニ關スル件ヲ制定シ之カ施行ヲ命ス

第一條　陸海軍ノ統帥ニ關シ勅定ヲ經タル規程ハ之ヲ軍令トス

第二條　軍令ニシテ公示ヲ要スルモノニハ上諭ヲ附シ親署ノ後御璽ヲ鈐シ主任ノ陸軍大臣海軍大臣年月日ヲ記入シ之ニ副署ス

第三條　軍令ノ公示ハ官報ヲ以テス

第四條　軍令ハ別段ノ施行時期ヲ定ムルモノノ外直ニ之ヲ施行ス

●地方官廳ノ發スル命令公布式（明治二十六年十月三十一日 勅令第百九十九號）

朕地方官廳ノ發スル命令ノ公布式ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　警視廳令、北海道廳令、府縣令、島廳令及郡令ニハ其ノ警視廳令、北海道廳令、府縣令、島廳令又ハ郡令ナルコトヲ明記シ警視總監、北海道廳長官、府縣知事、島司又ハ郡長各之ニ署名シ公布ノ年月日ヲ記入シテ同日之ヲ公布スヘシ

第二條　警視廳令、北海道廳令及府縣令ヲ公布スルノ方法ハ警視廳令、北海道廳令又ハ府縣令ノ定ムル所ニ依ル

島廳令及郡令ヲ公布スルノ方法ハ北海道廳令又ハ府縣令ノ定ムル所ニ依ル

第三條　警視廳令、北海道廳令及府縣令ハ特ニ施行ノ期日ヲ掲クルモノヲ除クノ外警視廳令、北海道廳令又ハ府縣令中ニ記入シタル公布ノ日ヨリ起算シ七日ヲ經テ之ヲ施行ス但島廳又ハ郡役所所在ノ島地ニ在テハ其ノ所轄島廳又ハ郡役所ニ到達シタル日ヨリ起算シ其ノ他ノ島地ニ在テハ所轄町村役場又ハ戸長役場ニ到達シタル日ヨリ起算ス

警視廳令、北海道廳令及府縣令ヲ登載シタル印刷物ヲ管内一般ノ島廳、郡區役所、町村役場又ハ戸長役場ニ配付スルヲ以テ公布ノ方法ト定メサル場合ニ於テ

モ前項ノ島廳、郡役所、町村役場又ハ戸長役場ニ對シテハ仍該令ヲ登載シタル印刷物若クハ謄本ヲ配付スヘキモノトス

第四條　島廳令及郡令ハ特ニ施行ノ期日ヲ掲クルモノヲ除クノ外島廳令又ハ郡令ニ記入シタル公布ノ日ヨリ起算シ七日ヲ經テ之ヲ施行ス但島廳及郡役所所在ノ地ヲ除クノ外島地ニ在テハ其ノ所轄町村役場又ハ戸長役場ニ到達シタル日ヨリ起算ス

島廳令及郡令ヲ登載シタル印刷物若クハ謄本ヲ部内一般ノ町村役場又ハ戸長役場ニ配付スルヲ以テ公布ノ方法ト定メサル場合ニ於テモ前項ノ町村役場又ハ戸長役場ニ對シテハ仍該令ヲ登載シタル印刷物若クハ謄本ヲ配付スヘキモノトス

附　則

第五條　北海道區長ノ發スル區令ニハ本令中郡令ニ關スル規程ヲ適用ス

第六條　本令ハ明治二十六年十二月一日ヨリ施行ス

●樺太ニ施行スヘキ法令ニ關スル件

（明治四十年三月二十九日）
（法律第二十五號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル樺太ニ施行スヘキ法令ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律ノ全部又ハ一部ヲ樺太ニ施行スルヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム但シ左ノ事項ニ關シテハ勅令ヲ以テ特別ノ規定ヲ設クルコトヲ得

一　土人ニ關スルコト
二　行政官廳又ハ公署ノ職權ニ關スルコト
三　法律上ノ期間ニ關スルコト
四　裁判所又ハ裁判長カ職權ヲ以テ選任シ又ハ選定スル辯護人、訴訟代理人又ハ訴訟承繼人ニ關スルコト

附　則

本法ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

●司法ニ關スル法律ヲ樺太ニ施行スルノ件

司法ニ關スル法律ヲ樺太ニ施行スルノ件

（明治四十年三月三十一日勅令第九十四號）

朕司法ニ關スル法律ヲ樺太ニ施行スルノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　左ニ掲クル法律ハ之ヲ樺太ニ施行ス

一　法例
二　裁判所構成法
三　裁判所構成法施行條例
四　執達吏規則
五　執達吏手數料規則
六　辯護士法
七　公證人規則
八　民法
九　民法施行法
十　明治三十五年法律第五十號
十一　地所質入書入規則
十二　明治三十七年法律第十七號
十三　不動産登記法
十四　明治三十九年法律第五十五號
十五　利息制限法
十六　明治三十二年法律第四十號
十七　明治三十三年法律第十三號
十八　供託法
十九　明治三十二年法律第五十號
二十　商法
二十一　商法施行法
二十二　明治二十三年法律第三十二號商法
二十三　商法施行條例
二十四　明治三十三年法律第十七號

二十五　刑法
二十六　刑法附則但シ第二十七條第一號及第四十四條第一號ヲ除ク
二十七　爆發物取締罰則
二十八　瀆職法
二十九　贋造金銀銅貨紙幣等取扱規則
三　十　明治十五年第二十五號布告
三十一　明治十五年第七十三號布告
三十二　明治二十二年法律第二十八號
三十三　明治二十二年法律第三十四號
三十四　明治二十三年法律第百號
三十五　明治二十三年法律第百一號
三十六　明治三十八年法律第五十一號
三十七　明治三十八年法律第六十六號
三十八　明治三十八年法律第七十號
三十九　民事訴訟法
四　十　民事訴訟法施行條例
四十一　民事訴訟費用法
四十二　民事訴訟用印紙法
四十三　明治十年第十九號布告
四十四　家資分散法
四十五　人事訴訟手續法
四十六　商事非訟事件印紙法
四十七　非訟事件手續法
四十八　明治三十二年法律第五十三號
四十九　競賣法
五　十　明治三十二年法律第六十七號
五十一　刑事訴訟法
五十二　違警罪即決例

五十三　逃亡犯罪人引渡條例
五十四　外國艦船乘組員ノ逮捕留置ニ關スル援助法
五十五　明治十四年太政官達第八十二號
五十六　明治十四年第五十九號布告
五十七　明治十四年司法省達甲第五號
五十八　明治十四年司法省達甲第七號
五十九　明治十八年第十二號布告
六十　監獄則
六十一　裁判所及臺灣總督府法院共助法
六十二　外國裁判所ノ囑託ニ因ル共助法
六十三　明治三十九年法律第五十六號第九條第一項

第二條　樺太ニ於ケル土人ノ外ニ關係者ナキ民事ニ關スル事項及土人ノミニ對スル刑事ニ關スル事項ハ從來ノ慣例ニ依ル
前項ニ關スル訴訟手續ハ裁判所ノ便宜ニ從フ

第三條　（四十二年勅令第百九十號ヲ以テ削除）

第四條　樺太廳支廳長、支廳出張所長タル官吏並林務、稅務、鑛業及水產ニ關スル事務ヲ管掌スル官吏ハ刑事訴訟法第四十七條第二項ノ司法警察官ノ職權ヲ有ス

第五條　樺太廳支廳長、其ノ代理タル官吏、支廳出張所長タル官吏及樺太廳支廳又ハ支廳出張所ニ勤務スル警部ハ其ノ管轄區域內ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決ス

第六條　民法又ハ商法ニ規定スル登記ヲ爲スヘキ期間ハ之ヲ二倍トス

第七條　民事訴訟法第百六十七條第一項及刑事訴訟法第十六條第一項ノ場合ニ於テハ海陸路四里每ニ一日ヲ伸長ス

第八條　裁判所又ハ裁判長カ職權ヲ以テ辯護士ヲ訴訟承繼人、訴訟代理人又ハ辯護人ニ選定シ若ハ選任スヘキ場合ニ於テハ辯護士ニ非サル者ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

附　則

本令ハ明治四十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

司法ニ關スル法律ヲ樺太ニ施行スルノ件

○勅令第百九十二號（明治四十一年八月七日）

刑法、刑法施行法及監獄法ハ之ヲ樺太ニ施行ス

附　則

本令ハ明治四十一年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

○勅令第百九十號（明治四十二年七月二十日）

公證人法ハ之ヲ樺太ニ施行ス

附　則

明治四十年勅令第九十四號中第三條　削除

本令ハ明治四十二年八月十六日ヨリ之ヲ施行ス

●韓國及關東州ニ於テ適用スル法律命令ノ施行時期ニ關スル件（明治四十年二月十四日勅令第十一號）

朕韓國及關東州ニ於テ適用スル法律命令ノ施行時期ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

韓國及關東州ニ於テ適用スル法律命令ハ其ノ各官廳ニ到達シタル翌日ヨリ起算シ七日ヲ經テ施行ス但シ別段ノ施行時期アル場合ハ此ノ限ニ在ラス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十九年勅令第百六十一號ハ之ヲ廢止ス

●統監府令公文式（明治三十九年一月十九日統監府令第四號）

統監府令公文式左ノ通相定ム

第一條　統監府令ハ其ノ統監府令ナルコトヲ明記シ統監之ニ署名シ公布ノ年月日ヲ記入シテ同日之ヲ公布スヘシ

第二條　統監府令ハ統監府公報ヲ以テ布告ス（四十二年統監府令第四號ヲ以テ本條中改正）

第三條　統監府令ハ其ノ各官廳ニ到達シタル翌日ヨリ起算シ滿七日ヲ經テ之ヲ施行ス但シ其ノ府令中ニ之ト異リタル施行時期ヲ定メタルトキハ此ノ限ニ在ラス

附　則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●理事廳令公文式（明治三十九年一月十九日統監府令第五號）

理事廳令公文式左ノ通相定ム

理事廳令公文式

第一條　理事廳令ハ其ノ理事廳令ナルコトヲ明記シ理事官之ニ署名シ公布ノ年月日ヲ記入シテ同日之ヲ公布スヘシ

第二條　理事廳令ヲ布告スル方法ハ理事官之ヲ定ム

第三條　理事廳令ハ公布ノ日ヨリ起算シ滿七日ヲ經テ之ヲ施行ス但シ其ノ廳令中ニ之ト異リタル施行時期ヲ定メタルトキハ此ノ限ニ在ラス

附　則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●臺灣ニ施行スヘキ法令ニ關スル件（明治三十九年四月十一日法律第三十一號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル臺灣ニ施行スヘキ法令ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　臺灣ニ於テハ法律ヲ要スル事項ハ臺灣總督ノ命令ヲ以テ之ヲ規定スルコトヲ得

第二條　前條ノ命令ハ主務大臣ヲ經テ勅裁ヲ請フヘシ

第三條　臨時緊急ヲ要スル場合ニ於テ臺灣總督ハ直ニ第一條ノ命令ヲ發スルコトヲ得

前項ノ命令ハ發布後直ニ勅裁ヲ請フヘシ若勅裁ヲ得サルトキハ臺灣總督ハ直ニ其ノ命令ノ將來ニ向テ效力ナキコトヲ公布スヘシ

第四條　法律ノ全部又ハ一部ヲ臺灣ニ施行スルヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條　第一條ノ命令ハ第四條ニ依リ臺灣ニ施行シタル法律及特ニ臺灣ニ施行スル目的ヲ以テ制定シタル法律及勅令ニ違背スルコトヲ得ス

第六條　臺灣總督ノ發シタル律令ハ仍其ノ效力ヲ有ス

附　則

本法ハ明治四十年一月一日ヨリ之ヲ施行シ明治四十四年十二月三十一日迄其ノ效力ヲ有スルモノトス

●律令ノ規定ニ依リ臺灣ニ適用セラルル法律ノ改正アリタルトキノ效力ニ關スル律令

（明治三十二年七月十六日　律令第二十一號）

臺灣總督府評議會ノ議決ヲ經タル律令ノ規定ニ依リ本島ニ適用セラルル法律ノ改正アリタルトキノ效力ニ關スル律令勅裁ヲ得テ茲ニ之ヲ發布ス

律令ノ規定ニ依リ本島ニ適用セラルル法律ノ改正アリタルトキハ各其改正法律ニ依ル但別段ノ規定アル場合ハ此限ニアラス

本令ハ本令施行前ニ於ケル法律ノ改正ニモ亦之ヲ適用ス

前二項ニ掲ケル改正法律ノ本島ニ於ケル施行期日ハ各其改正法律施行期日ニ依ル但改正法律ノ施行期日本令施行前ニ係ルモノハ本令施行ノ日ヨリ施行ス

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●法律命令ノ臺灣ニ於ケル施行期限

（明治二十九年八月十九日　勅令第二百九十二號）

朕法律命令ノ臺灣ニ於ケル施行期限ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

法律命令ノ臺灣ニ於ケル施行期限ハ其ノ各廳ニ到達シタル翌日ヨリ起算シテ七日トス但シ別段ノ施行時期アル場合ハ此ノ限ニ在ラス（三十四年勅令第二百十八號四十年同第十二號ヲ以テ本令中改正）

●臺灣總督ノ發スル命令公布式（明治三十四年十一月二十日臺灣總督府令第百三號）

臺灣總督ノ發スル命令ハ臺灣日日新報附錄府報ニ掲載スルヲ以テ公布式ト定ム

本令ハ明治三十四年十二月一日ヨリ施行ス

明治三十三年九月府令第七十號ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

●廳令公布式（明治三十七年九月二十八日臺灣總督府令第七十號）

廳令公布式左ノ通相定ム

本令ハ明治三十七年十月十五日ヨリ之ヲ施行ス

第一條　廳令ハ其ノ廳令ナルコトヲ明記シ廳長之ニ署名シ公布ノ年月日ヲ記入シテ同日之ヲ公布スヘシ

第二條　廳令ヲ公布スル方法ハ廳令ノ定ムル所ニ依ル

第三條　廳令ハ公布ノ日ヨリ起算シ滿七日ヲ經テ之ヲ施行ス但シ其ノ廳令中ニ之ト異ナリタル施行時期ヲ定メタルトキハ此ノ限ニ在ラス

●關東州ニ於ケル諸般ノ成規ニ關スル件（明治三十九年八月一日勅令第二百三號）

朕關東州ニ於ケル諸般ノ成規ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

關東州ニ於ケル諸般ノ成規ハ別段ノ規定ヲ設クル迄當分ノ内從前ノ例ニ依ル但シ租稅其ノ他ノ收入及其ノ支出ニ關シテハ會計檢査院ノ檢査ヲ經ルコトヲ要ス

附　則

本令ハ明治三十九年九月一日ヨリ之ヲ施行ス

●關東都督府公布式（明治三十九年九月一日關東都督府令第一號）

關東都督ノ發スル命令ノ公布式左ノ通相定ム

關東都督府公布式

第一條　關東都督ノ發スル命令ハ其ノ關東都督ノ命令ナルコトヲ明記シ關東都督之ニ署名シ公布ノ年月日ヲ記入シテ之ヲ公布スヘシ

第二條　關東都督ノ命令ハ滿洲日日新聞附錄府報ヲ以テ之ヲ布告ス（四十年關東都督府令第六十二號ヲ以テ本令中改正）

第三條　關東都督ノ命令ハ特ニ施行期日ヲ掲クルモノヲ除クノ外其ノ各官廳ニ到達シタル翌日ヨリ起算シ滿七日ヲ經テ之ヲ施行ス

附　則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●民政署公布式（明治三十九年九月一日 關東都督府令第三號）

民政署長ノ發スル命令ノ公布式左ノ通相定ム

民政署公布式

第一條　民政署長ノ發スル命令ハ其ノ署令ナルコトヲ明記シ民政署長之ニ署名シ公布ノ年月日ヲ記入シテ之ヲ公布スヘシ

第二條　署令公布ノ方法ハ民政署長ノ定ムル所ニ依ル

第三條　民政署令ハ特ニ施行期日ヲ掲クルモノヲ除クノ外公布ノ日ヨリ起算シ滿七日ヲ經テ之ヲ施行ス

附　則

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

裁判所構成法

裁判所管轄　裁判所職員
執達吏規則　辯護士法
公證人法　共助法
行政裁判法　訴願法

裁判所構成法目次

○裁判所構成法(二三、法律六)

第一編 裁判所及檢事局

第一章 總則……一

第二章 區裁判所……四

第三章 地方裁判所……九

第四章 控訴院……一三

第五章 大審院……一五

第二編 裁判所及檢事局ノ官吏

第一章 判事又ハ檢事ニ任セラルヽニ必要ナル準備及資格……一九

第二章 判事……二三

第三章 檢事……二四

第四章 裁判所書記……二六

第五章　執達吏……二九
第六章　廷丁……三〇
第三編　司法事務ノ取扱
第一章　開廷……三〇
第二章　裁判所ノ用語……三四
第三章　裁判ノ評議及言渡……三四
第四章　裁判所及檢事局ノ事務章程ノ……三六
第五章　司法年度及休暇……三六
第六章　法律上ノ共助……三八
第四編　司法行政ノ職務及監督權……三九
附則……四二
○裁判所構成法施行條例（二三、法律二二）……四三
○裁判所位置及管轄區域（二三、法律六二）……四七
○區裁判所出張所設置（二二、勅令六四）……四七
○區裁判所及出張所登記管轄區域（二六、司法省令一〇）……四七
○地方裁判所支部及管轄表（二三、司法省令三等）……四八
○判事檢事官等俸給令（三二、勅令一五三）……四九
○判事檢事官等俸給令ニ依リ指定ノ區裁判所（四二、司法省令九）……五四ノ二
○判事檢事官等俸給令ニ依リ指定ノ地方裁判所支部（四二、司法省令一一）……五四ノ三
○地方裁判所支部ノ判事檢事及區裁判所監督判事補職ノ件（二四、司法省訓令五）……五五
○判事檢事登用試驗規則（二四、司法省令三等）
第一章　試驗委員……五六
第二章　受驗資格……五七
第三章　第一回試驗……五八
第四章　實地修習……六〇
第五章　第二回試驗……六三

○判事檢事登用試驗規則ニ依ル指定學校（二六、司法省告示九一等）……六四
○判事休職ニ係ル件（二三、勅令二五四）……六四
○判事懲戒法（二三、法律六八）
第一章　總則……六六
第二章　懲罰……六六
第三章　懲戒裁判所……六七
第四章　裁判手續……六九
第五章　職務停止……七四
第六章　懲戒裁判手續ト刑事裁判手續トノ關係……七五
第七章　補則……七六
○判事檢事裁判所書記及執達吏制服（二三、勅令二六〇）……七六
○裁判所書記長書記定員（四三、勅令五八）……七六
○裁判所書記長官等ノ件（二七、勅令一一八）……八〇

○裁判所書記長特別任用ノ件（三〇、勅令二二二）……八〇
○裁判所書記登用試驗規則（二四、司法省令四）
第一章　試驗……八一
第二章　實地修習……八二
○裁判所書記登用試驗及第證書雛形（三一、司法省訓令二）……八三
○裁判所書記試驗手數料納付ノ件（三〇、司法省令一六）……八五
○交通至難ノ島嶼ニ設置シタル裁判所及檢事局ノ判事檢事等ニ手當給與ノ件（三三、勅令七七）……八五
○島嶼在勤者月手當給與細則（三三、司法省令一三）……八七
○執達吏規則（二三、法律五一）……八九
○執達吏手數料規則（二三、法律五二）……九五
○執達吏登用規則（二三、司法省令二）……一〇三
○執達吏代理鑑札調製方（二三、司法省訓令三）……一〇九
○執達吏懲戒令（四一、勅令一五三）……一一〇

○辯護士法〔二六、法律七〕
第一章　辯護士ノ資格及職務……一一三
第二章　辯護士名簿……一一五
第三章　辯護士ノ權利及義務……一一六
第四章　辯護士會……一一六
第五章　懲戒……一一八
附　則……一一九
○辯護士名簿登錄規則〔二六、司法省令五〕……一二〇
○辯護士試驗規則〔二六、司法省令九〕……一二三
○辯護士職服〔二六、司法省令四〕……一二七
○公證人法〔四一、法律五三〕
第一章　總則……一二九
第二章　任免及所屬……一三一
第三章　職務執行ニ關スル通則……一三三
第四章　證書ノ作成……一三五
第五章　認證……一四八
第六章　代理兼務及受繼……一四九
第七章　監督及懲戒……一五三
附　則……一五五
○公證人法施行細則〔四二、司法省令一四〕……一五七
○公證人定員表〔四二、司法省令一五〕……一五八ノ六
○公證人手數料規則〔四二、勅令一七四〕……一五八ノ七
○公證人懲戒委員會規則〔四二、勅令一七五〕……一五八ノ一六
○裁判所及臺灣總督府法院共助法〔三三、法律八三〕……一五九
○裁判所臺灣總督府法院統監府裁判所及關東都督府法院關東都督府民政署長又ハ民政支署長相互間ニ於ケル法律上ノ共助ニ關スル件〔四〇、法律五二〕……一六〇
○裁判所臺灣總督府法院統監府裁判所及關東都督府法院關東都督府民政署長又ハ民政支署長相互間ニ於ケル共助ニ關スル費

用及囚人刑事被告人押送ニ關スル件〔四〇、勅令二九二〕……一六〇
○裁判所臺灣總督府法院統監府裁判所關東都督府法院及關東都督府民政署長等ノ判決ノ執行ニ關スル件〔四二、法律三六〕……一六三
○外國裁判所ノ囑託ニ因ル共助法〔三八、法律六三〕……一六三ノ三
○統監府裁判所令〔四二、勅令二三六〕……一六五
○統監府裁判所司法事務取扱令〔四二、勅令二三七〕……一七〇
○韓國人ニ係ル司法ニ關スル件〔四二、勅令二三八〕……一七〇ノ七
○間島ニ於ケル領事官ノ裁判ニ關スル件〔四三、法律四〇〕……一七〇ノ九
○韓國人ニ日本法規ヲ適用スル場合ニ關スル件〔四三、勅令一九六〕……一七〇ノ一〇
○滿洲ニ於ケル領事裁判ニ關スル件〔四一、法律五二〕……一七〇ノ一一
○關東州裁判令〔四一、勅令二一二〕……一七一
○關東州ニ於ケル刑事ニ關スル件〔四一、勅令二五七〕……一七一ノ二
○領事官ノ職務ニ關スル件〔三二、法律七〇〕……一七三
○領事官職務規則〔三三、勅令一五三〕……一七六
○在外帝國領事官管轄區域〔四二、外務省令一〕……一八一
○領事官ノ徵收スル手數料及出張費用ニ關スル規程〔三三、外務省令三〕……一八一
○領事官ノ徵收スル手數料及出張費用ニ對シ收入印紙ヲ以テ納付セシムル地方指定〔三三、外務省告示四一〕……一八五
○行政裁判法〔二三、法律四八〕
第一章　行政裁判所組織……一八七
第二章　行政裁判所權限……一九〇
第三章　行政訴訟手續……一九一
第四章　附則……一九六
○行政廳ノ違法處分ニ關スル行政裁判ノ件〔二三、法律一〇六〕……一九七
○行政訴訟豫納金手續〔三二、行政裁判所告示一〕……一九八
○行政訴答書書式〔二四、行政裁判所告示一〕……一九九
○行政裁判所處務規程〔二三、勅令一九二〕……二〇三

○行政裁判法第八條第二項ニ依ル組織及事務分配ノ件〔三四、勅令七二〕……二〇五
○行政裁判所評定官員數竝書記ノ員數職務ノ件〔二三、勅令一一一〕……二〇六
○行政裁判所ニ臨時職員增置ノ件〔四三、勅令一一六〕……二〇七
○訴願法〔二三、法律一〇五〕……二〇九

●裁判所構成法（明治二十三年二月十日 法律第六號）

朕裁判所構成法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此ノ法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

裁判所構成法

第一編　裁判所及檢事局

第一章　總則

第一條　左ノ裁判所ヲ通常裁判所トス

第一　區裁判所
第二　地方裁判所
第三　控訴院
第四　大審院

第二條　通常裁判所ニ於テハ民事刑事ヲ裁判スルモノトス但シ法律ヲ以テ特別裁判所ノ管轄ニ屬セシメタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第三條　地方裁判所控訴院及大審院ハ合議裁判所トシ數人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ總テノ事件ヲ審問裁判ス但シ訴訟法又ハ特別法ニ別段規定シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第四條　裁判所ノ設立廢止及管轄區域並ニ其ノ變更ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五條　各裁判所ニ相應ナル員數ノ判事ヲ置ク

第六條　各裁判所ニ檢事局ヲ附置ス檢事ハ刑事ニ付公訴ヲ起シ其ノ取扱上必要ナル手續ヲ爲シ法律ノ正當ナル適用ヲ請求シ及判決ノ適當ニ執行セラルヽヤヲ監視シ又民事ニ於テモ必要ナリト認ムルトキハ通知ヲ求メ其ノ意見ヲ述フルコトヲ得又裁判所ニ屬シ若ハ之ニ關ル司法及行政事件ニ付公益ノ代表者トシテ法律上其ノ職權ニ屬スル監督事務ヲ行フ

檢事ハ裁判所ニ對シ獨立シテ其ノ事務ヲ行フ

檢事局ノ管轄區域ハ其ノ附置セラレタル裁判所ノ管轄區域ニ同シ

若一人ノ檢事若ハ數人ノ檢事悉ク差支アリテ或ル事件ヲ取扱フコトヲ得サルトキハ裁判所長又ハ區裁判所ニ於テ判事若ハ監督判事ハ其ノ事件猶豫スヘカラサルニ於テハ判事ニ檢事ノ代理ヲ命シ其ノ事件ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第七條　檢事局ニ相應ナル員數ノ檢事ヲ置ク

第八條　各裁判所ニ書記課ヲ設ク書記課ハ往復會計記錄其ノ他此ノ法律又ハ他ノ法律ニ特定シタル事務ヲ取扱フ

裁判所ニ附置セラレタル檢事局ニ於テ前項ノ如キ事務ヲ取扱フ爲必要ナリト認メタルトキニ限リ別ニ書記課ヲ設クルコトヲ得但シ合議裁判所ノ檢事局ニ限ル

司法大臣ハ裁判所ノ會計事務ヲ專任スル爲特別官吏ヲ裁判所ニ置クコトヲ得

第九條　區裁判所ニ執達吏ヲ置ク執達吏ハ裁判所ヨリ發スル文書ヲ送達シ及裁判所ノ裁判ヲ執行ス

前項ノ外執達吏ハ此ノ法律又ハ他ノ法律ニ定メタル特別ノ職務ヲ行フ

第十條　法律ヲ以テ特定シタルモノヲ除ク外左ノ場合ニ於テ適當ノ申請アルトキハ關係アル各裁判所ヲ併セテ之ヲ管轄スル直近上級ノ裁判所ハ何レノ裁判所ニ於テ本件ヲ裁判スルノ權アルヤヲ裁判ス

第一　權限アル裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ裁判權ヲ行

フコトヲ得ス且此ノ法律第十三條ニ依リ之ニ代ルヘキコトヲ定メラレタル裁判所モ亦之ヲ行フコトヲ得サルトキ

第二　裁判所管轄區域ノ境界明確ナラサルカ為其ノ權限ニ付疑ヲ生シタルトキ

第三　法律ニ從ヒ又ハ二以上ノ確定判決ニ因リ二以上ノ裁判所裁判權ヲ互有スルトキ

第四　二以上ノ裁判所權限ヲ有セストノ確定判決ヲ為シ又ハ權限ヲ有セストノ確定判決ヲ受ケタルモ其ノ裁判所ノ一ニ於テ裁判權ヲ行フヘキトキ

第二章　區裁判所

第十一條　區裁判所ノ裁判權ハ單獨判事之ヲ行フ

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ其ノ裁判事務ヲ各判事ニ分配ス

此ノ事務分配ハ毎年地方裁判所長前以テ之ヲ定ム

區裁判所判事ノ取扱ヒタル事ハ裁判事務分配上其ノ事他ノ判事ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其ノ效力ヲ失フコトナシ

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ハ其ノ一人ヲ監督判事トシ之ニ其ノ行政事務ヲ委任ス

第十二條　事務分配一タヒ定マリタルトキハ司法年度中之ヲ變更セス但シ一人ノ判事ノ分擔多キニ過キ又ハ判事轉退シ又ハ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ久ク闕勤スル者アル等引續キ差支ヲ生シタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十三條　區裁判所ノ判事差支アルトキハ毎年地方裁判所長ノ前以テ定メタル順序ニ從ヒ互ニ相代理ス但シ監督判事ノ職務ハ其ノ裁判所ノ判事官等ノ順序ニ從ヒ之ヲ代理ス

一ノ區裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ事務ヲ取扱フコトヲ得サルトキ之ニ代ルヘキ他ノ區裁判所ハ前項ニ同ク毎年前以テ之ヲ定ム

第十四條　區裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス但シ反訴ニ關リテハ民事訴訟法ノ定ムル所ニ依ル

第一　二百圓ヲ超過セサル金額又ハ價額二百圓ヲ超過セサル物ニ關ル請求

（三十八年法律第六十七號ヲ以テ百圓ヲ二百圓ニ改ム）

第二　價額ニ拘ラス左ノ訴訟

（イ）住家其ノ他ノ建物又ハ其ノ或ル部分ノ受取明渡使用占據若ハ修繕ニ關リ又ハ賃借人ノ家具若ハ所持品ヲ賃貸人ノ差押ヘタルコトニ關リ賃貸人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

（ロ）不動產ノ經界ノミニ關ル訴訟

（ハ）占有ノミニ關ル訴訟

（ニ）雇主ト雇人トノ間ニ雇期限一年以下ノ契約ニ關リ起リタル訴訟

（ホ）左ニ揭ケタル事項ニ付旅人ト旅店若ハ飲食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴訟

（一）賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料

（二）旅店若ハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲預ケタル手荷物金錢又ハ有價物

第十五條　區裁判所ハ非訟事件ニ付法律ニ定メタル範圍及方法ニ從ヒ左ノ事務ヲ取扱フノ權ヲ有ス

第一　未成年者瘋癲者白癡者失踪者其ノ他法律若ハ判決ニ因リ治產ノ禁ヲ受ケタル者ノ後見人若ハ管財人ヲ監督スル事

第二　不動產及船舶ニ關ル權利關係ヲ登記スル事

第三　商業登記及特許局ニ登錄シタル特許意匠及商標ノ登記ヲ爲ス事

第十六條ノ一　區裁判所ハ刑事ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス但シ第二以下ニ記載シタル罪ハ豫審ヲ經サルモノニ限ル（四十一年法律第三十號ヲ以テ改正）

第一　拘留又ハ科料ニ該ル罪

第二　竊盜ノ罪

第三　竊盜及刑法第二百五十四條ノ罪ノ贓物ニ關スル罪

第四　刑法第百三十條、第百七十五條、第百八十五條乃至第百八十七條及第二百九條ノ罪並ニ第百三十條ノ未遂罪

第五　一年以下ノ懲役若ハ禁錮又ハ三百圓ヲ超過セサル罰金ニ該ル罪

二個以上ノ主刑中其ノ一個ヲ科スヘキ罪ニシテ其ノ刑前項第一又ハ第五ノ規定ニ適セサルモノアルトキハ區裁判所ハ其ノ裁判權ヲ有セス

第十六條ノ二　前條第一項第五ニ記載シタル罪ニ付テハ累犯又ハ併合罪トシテ處分スヘキ場合ト雖モ區裁判所其ノ裁判權ヲ有ス（同上ヲ以テ追加）

第十六條ノ三　司法大臣ハ地方裁判所ノ管轄區域內ノ一ノ區裁判所ノ管轄ニ屬スル刑事ノ事務ノ全部又ハ一部分ヲ其ノ地方裁判所ノ管轄區域內ノ他ノ區裁判所ヲシテ取扱ハシムルコトヲ得（三十八年法律第六十七號ヲ以テ改正）

第十七條　前數條ニ掲ケタルモノヲ除ク外區裁判所ノ權限ハ此ノ章ニ掲ケタル事件ニ關リ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第十八條　各區裁判所ノ檢事局ニ檢事ヲ置ク

區裁判所檢事局ノ檢事ノ事務ハ其ノ地ノ警察官憲兵將校下士又ハ林務官之ヲ取扱フコトヲ得

司法大臣ハ適當ナル場合ニ於テハ區裁判所判事試補又ハ郡市町村ノ長ヲシテ檢事ヲ代理セシムルコトヲ得

第三章　地方裁判所

第十九條　地方裁判所ヲ第一審ノ合議裁判所トス

各地方裁判所ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ク

第二十條　各地方裁判所ニ地方裁判所長ヲ置ク

地方裁判所長ハ裁判所ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

地方裁判所ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第二十一條　司法大臣ハ每年各地方裁判所ノ判事一人若ハ二人以上ニ其ノ裁判所ノ裁判權ニ屬スル刑事ノ豫審ヲ爲スコトヲ命ス

第二十二條　各地方裁判所ノ事務ハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ各部及各豫審判事ニ之ヲ分配ス

各地方裁判所ノ各部長及部員ノ配置及所長部長部員差支アルトキノ代理モ亦每年前以テ之ヲ定ム

前二項ニ掲ケタル諸件ハ裁判所長部長及部ノ上席判事一人ノ會議ニ於テ裁判所長會長トナリ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル

地方裁判所長ハ次年自ラ部長トナルヘキ部ヲ指定スヘシ

第二十三條　或ル部ニ於テ著手シタル事務ニシテ司法年度ノ終ニ臨ミ未タ終結ニ至ラサルモノハ裁判所長便利ト認ムルトキ同部員ヲシテ引續キ之ヲ結了セシムルコトヲ得（四十四年法律第七十一號ヲ以テ本條中改正）

豫審判事ノ取扱フ事務ニシテ未タ終結ニ至ラサルモノモ亦前項ニ同シ

第二十四條　第二十二條ニ從ヒ事務ノ分配及判事ノ配置一タヒ定マリタルトキハ一部ノ事務多キニ過キ又ハ判事轉退シ又ハ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ久ク闕勤スル者アル等引續キ差支アルニ非サレハ司法年度中之ヲ變更セス（同上）

裁判所ノ事務其ノ現在ノ部ニ過多ナル場合ニ於テ司法大臣適宜ト認ムルトキハ新ニ一部又ハ數部ヲ設クルコトヲ得

第二十五條　地方裁判所ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同裁判所ノ判事中其ノ代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其ノ事件緊急ナリト認ムルトキハ裁判所長ハ其ノ管轄區域内ノ區裁判所判事又ハ豫備判事ニ其ノ代理ヲ命スルコトヲ得

第二十六條　地方裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　第一審トシテ

區裁判所ノ權限又ハ第三十八條ニ定メタル控訴院ノ權限ニ屬スルモノヲ除キ其ノ他ノ請求

第二　第二審トシテ

（イ）區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

（ロ）區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二十七條　地方裁判所ハ刑事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　第一審トシテ

區裁判所ノ權限並ニ大審院ノ特別權限ニ屬セサル刑事訴訟

第二　第二審トシテ

（イ）區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

（ロ）區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二十八條　地方裁判所ハ破産事件ニ付一般ノ裁判權ヲ有ス

第二十九條　地方裁判所ハ非訟事件ニ關ル區裁判所ノ決定及命令ニ對シ法律ニ定メタル抗告ニ付裁判權ヲ有ス

第三十條　地方裁判所ノ權限竝ニ其ノ裁判權ヲ行フノ範圍及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第三十一條　司法大臣ハ地方裁判所ト其ノ管轄區域内ノ區裁判所ト遠隔ナルカ若ハ交通不便ナルカ爲至當ト認ムルトキハ地方裁判所ニ屬スル民事及刑事ノ事務ノ一部分ヲ取扱フ爲一若ハ二以上ノ支部ノ設置ヲ命スルコトヲ得且支部ヲ開クヘキ區裁判所ヲ定ム

支部ニハ之ヲ設置シタル區裁判所若ハ近隣ノ區裁判所ノ判事ヲ用ヰルコトヲ得

此ノ場合ニ於テ判事ヲ選用スルノ權ハ司法大臣ニ屬ス

司法大臣ハ支部ニ勤ムヘキ豫審判事及檢事ヲ命ス

司法大臣ハ支部ノ本部タル地方裁判所ノ管轄區域内ノ區裁判所判事ニ豫審判事ヲ命スルコトヲ得

代理ニ關ル第二十五條ハ支部ニモ亦之ヲ適用ス

第三十二條　地方裁判所ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ三人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其ノ三人ノ判事中一人ヲ裁判長トス且豫備判事ハ如何ナル事情アルモ二人以上其ノ部ニ列席スルコトヲ得ス其ノ他ノ事件ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

第三十三條　各地方裁判所ノ檢事局ニ檢事正ヲ置ク檢事正ハ檢事局ノ事務取扱ヲ分配指揮及監督ス但シ檢事局ノ其ノ他ノ檢事ハ事務取扱ニ付何等ノ事件ニ拘ラス特別ノ許可ヲ受ケスシテ檢事正ヲ代理スルノ權ヲ有ス

第四章　控訴院

第三十四條　控訴院ヲ第二審ノ合議裁判所トス

各控訴院ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ク

第三十五條　各控訴院ニ控訴院長ヲ置ク

控訴院長ハ控訴院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

控訴院ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第三十六條　事務ノ分配及結了竝ニ判事ノ代理ニ付テハ第二十二條第二十三條及

第二十五條ヲ左ノ變更ヲ以テ控訴院ニ適用ス

第一　前項ニ掲ケタル各條ヲ以テ地方裁判所長ニ與ヘタル權ハ控訴院長ニモ之ヲ與ヘタルモノトス

第二　控訴院ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同院ノ判事中其ノ代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其ノ事件緊急ナリト認ムルトキハ之ヲ代理スル判事ヲ出スヘキ旨ヲ控訴院長ヨリ其ノ控訴院所在地ノ地方裁判所長ニ通知シ其ノ裁判所ノ判事ヲシテ代理ヲ爲サシムルコトヲ得但シ豫備判事ヲ用ヰルコトヲ得ス

第三十七條　控訴院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一　地方裁判所ノ第一審判決ニ對スル控訴

第二　區裁判所ノ判決ニ對スル控訴ニ付爲シタル地方裁判所ノ判決ニ對スル上告

第三　地方裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第三十八條　皇族ニ對スル民事訴訟ニ付第一審及第二審ノ裁判權ハ東京控訴院ニ屬ス但シ第一審ノ訴訟手續ニ付テハ地方裁判所ノ第一審手續ヲ適用ス

第三十九條　控訴院ノ權限竝ニ其ノ裁判權ヲ行フノ範圍及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第四十條　控訴院ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ五人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其ノ五人ノ判事中一人ヲ裁判長トス其ノ他ノ事件ハ訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

第四十一條　第三十八條ノ場合ニ於テ第一審ハ五人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ審問裁判シ第二審ハ特ニ七人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ審問裁判ス其ノ五人又ハ七人ノ判事中一人ヲ裁判長トス

第四十二條　各控訴院ノ檢事局ニ檢事長ヲ置ク

檢事長竝ニ其ノ他ノ檢事ノ職權ニ付テハ第三十三條ヲ適用ス

第五章　大審院

第四十三條　大審院ヲ最高裁判所トス

大審院ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ク

第四十四條　大審院ニ大審院長ヲ置ク

大審院長ハ大審院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

大審院ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第四十五條　大審院ノ事務ノ分配竝ニ代理ノ順序ハ毎年部長ト協議シ大審院長前以テ之ヲ定ム

大審院長ハ次年自ラ上席セントスル部ヲ指定スヘシ

大審院ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同院ノ判事中其ノ代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其ノ事件緊急ナリト認ムルトキハ之ヲ代理スル判事ヲ出スヘキ旨ヲ大審院長ヨリ其ノ所在地ノ控訴院長ニ通知シ其ノ控訴院ノ判事ヲシテ代理ヲ爲サシムルコトヲ得

第四十六條　大審院長ハ何時ニテモ部長若ハ部員ノ承諾ヲ得テ之ヲ他ノ部ニ轉セシムルコトヲ得

第四十七條　大審院ニ於テ一タヒ定マリタル部ノ組立ヲ變更シタルトキハ現ニ取扱中ノ事務ニ付テハ第二十三條ヲ適用ス

司法年度中事務分配ノ變更ニ付テハ第二十四條ヲ適用ス

第四十八條　大審院ニ於テ裁判ヲ爲スニ當リ法律ノ點ニ付テ表シタル意見ハ其ノ訴訟ノ一切ノ事ニ付下級裁判所ヲ覊束ス

第四十九條　大審院ノ或ル部ニ於テ上告ヲ審問シタル後法律ノ同一ノ點ニ付曾テ一若ハ二以上ノ部ニ於テ爲シタル判決ト相反スル意見アルトキハ其ノ部ハ之ヲ大審院長ニ報告シ大審院長ハ其ノ報告ニ因リ事件ノ性質ニ從ヒ民事ノ總部若ハ刑事ノ總部又ハ民事及刑事ノ總部ヲ聯合シテ之ヲ再ヒ審問シ及裁判スルコトヲ命ス

第五十條　大審院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス（四十一年法律第三十號ヲ以テ第二號改正）

第一　終審トシテ

（イ）第三十七條第二ニ依リ爲シタル判決及第三十八條ノ第一審ノ判決ニ非サル控訴院ノ判決ニ對スル上告

（ロ）控訴院ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二　第一審ニシテ終審トシテ
刑法第七十三條、第七十五條及第七十七條乃至第七十九條ノ罪竝ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮以上ノ刑ニ處スヘキモノノ豫審及裁判

第五十一條　前條第二ニ掲ケタル事件ニ付大審院ハ必要ナリト認ムルトキハ事件ノ審問裁判ヲ為ス為控訴院若ハ地方裁判所ニ於テ法廷ヲ開クコトヲ得

此ノ場合ニ於テハ控訴院判事ヲ以テ部員ニ加フルコトヲ得但シ其ノ半數ニ滿ツルコトヲ得ス

第五十二條　大審院ノ權限竝ニ其ノ裁判權ヲ行フノ範圍及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第五十三條　大審院ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ七人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其ノ七人ノ判事中一人ヲ裁判長トス其ノ他ノ事件ハ訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

第五十四條　第四十九條ニ定メタル場合ニ於テハ聯合部ノ判事少クトモ三分ノ二列席スルコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テ民事ノ總部若ハ刑事ノ總部聯合スルトキ又ハ民事及刑事ノ總部聯合スルトキハ總部ノ判事中官等最モ高キ者ヲ部長ト為ス大審院長ハ至當ナリト認ムルトキハ自ラ總部ニ長タルノ權ヲ有ス

第五十五條　大審院長ハ第五十條ニ依リ大審院ニ於テ第一審ニシテ終審ヲ為スヘキ各別ノ場合ニ付大審院ノ判事ニ豫審ヲ命ス但シ便宜ニ依リ各裁判所判事ヲシテ豫審ヲ為サシムルコトヲ得

第五十六條　大審院ノ檢事局ニ檢事總長ヲ置ク

檢事總長竝ニ其ノ他ノ檢事ノ職權ニ付テハ第三十三條ヲ適用ス

第二編　裁判所及檢事局ノ官吏

第一章　判事又ハ檢事ニ任セラルヽニ必要ナル準備及資格

第五十七條　判事又ハ檢事ニ任セラルヽニハ第六十五條ニ掲ケタル場合ヲ除キ二回ノ競爭試驗ヲ經ルコトヲ要ス

第五十八條　志願者前條ノ競爭試驗ヲ受ケ得ルニ必要ナル資格竝ニ此ノ試驗ニ關ル細則ハ判事檢事登用試驗規則中ニ司法大臣之ヲ定ム

第一回試驗ニ及第シタル者ハ第二回試驗ヲ受クルノ前試補トシテ裁判所及檢事局ニ於テ一年六月以上實地修習ヲ爲スコトヲ要ス（四十一年法律第十號ヲ以テ本項中改正）

前項ノ修習ニ關ル細則モ亦試驗規則中ニ之ヲ定ム

第五十九條　司法大臣ハ試補ノ行狀罷免スルニ足レリト認ムルトキハ何時ニテモ之ヲ罷免スルコトヲ得此ノ罷免ニ關ル細則モ亦試驗規則中ニ之ヲ定ム

第六十條　一年以上修習ヲ爲シタル試補ハ其ノ修習ヲ現ニ監督スル判事ノ命アルトキ區裁判所ニ於テ或ル司法事務ヲ取扱フコトヲ得

豫審判事及地方裁判所ノ受命判事モ亦其ノ附屬ノ試補ヲシテ自己ニ代リ或ル事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第六十一條　試補ハ如何ナル場合ニ於テモ左ノ事務ヲ取扱フノ權ヲ有セス

第一　訴訟事件ト非訟事件トニ拘ラス裁判ヲ爲ス事

第二　證據ヲ調フル事但シ前條第二項ノ場合ヲ除ク

第三　登記ヲ爲ス事

第六十二條　第二回ノ競爭試驗ニ及第シタル試補ハ判事又ハ檢事ニ任セラルヽコトヲ得

第六十三條　新任ノ判事又ハ檢事ハ闕位アルトキ之ヲ區裁判所若ハ地方裁判所ノ判事又ハ區裁判所若ハ地方裁判所ノ檢事局ノ檢事ニ補ス

司法大臣ハ闕位アルマテ新任ノ判事又ハ檢事ニ豫備判事又ハ豫備檢事トシテ勤務スルコトヲ命シ之ヲ司法省又ハ區裁判所又ハ地方裁判所又ハ其ノ裁判所ノ檢事局ニ用ウ

第六十四條　區裁判所又ハ地方裁判所又ハ其ノ檢事局ニ用ヰラレタル豫備判事又ハ豫備檢事ハ判事又ハ檢事差支アリテ職務ニ從事スルコトヲ得ス且通常代理ノ規程ニ依リ難キコトアルトキハ第三十二條ノ制限ニ從ヒ司法大臣ハ之ニ其ノ判事又ハ檢事ヲ代理セシムルコトヲ得

司法大臣ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ判事又ハ其ノ檢事局ノ檢事ニ一時闕位アル間ハ此ノ法律ノ範圍內ニ於テ豫備判事又ハ豫備檢事ヲ以テ之ヲ充タスコトヲ得

第六十五條　三年以上帝國大學法科教授若ハ辯護士タル者ハ此ノ章ニ揭ケタル試驗ヲ經スシテ判事又ハ檢事ニ任セラルヽコトヲ得

帝國大學法科卒業生ハ第一回試驗ヲ經スシテ試補ヲ命セラルヽコトヲ得

第六十六條　左ニ揭ケタル者ハ判事又ハ檢事ニ任セラルヽコトヲ得ス

第一　重罪ヲ犯シタル者但シ國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

第二　定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三　身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者

第二章　判事

第六十七條　判事ハ勅任又ハ奏任トシ其ノ任官ヲ終身トス

第六十八條　大審院長ハ勅任判事ノ中ヨリ天皇之ヲ補シ各控訴院長及大審院ノ部長ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任判事ノ中ヨリ之ヲ補ス其ノ他ノ判事ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

第六十九條　五年以上判事タル者又ハ五年以上帝國大學法科教授若ハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレシ者ニ非サレハ控訴院判事ニ補セラルヽコトヲ得ス

第七十條　十年以上判事タル者又ハ十年以上檢事帝國大學法科教授若ハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレシ者ニ非サレハ大審院判事ニ補セラルヽコトヲ得ス

第七十一條　第六十九條及第七十條ニ揭ケタル年限ヲ算フルニハ補職ノ時マテ各〻其ノ條ニ列記シタル職務ノ一ノミニ引續キ從事シタルコトヲ必要トセス

第七十二條　判事ハ在職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ得ス

第一　公然政事ニ關係スル事

第二　政黨ノ黨員又ハ政社ノ社員トナリ又ハ府縣郡市町村ノ議會ノ議員トナル事

第三　俸給アル又ハ金錢ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就ク事

第四　商業ヲ營ミ又ハ其ノ他行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル業務ヲ營ム事

第七十三條　第七十四條及第七十五條ノ場合ヲ除ク外判事ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其ノ意ニ反シテ轉官轉所停職免職又ハ減俸セラルヽコトナシ但シ豫備判事タルトキ及補闕ノ必要ナル場合ニ於テ轉所ヲ命セラルヽハ此ノ限ニ在ラス

前項ハ懲戒取調又ハ刑事訴追ノ始若ハ其ノ間ニ於テ法律ノ許ス停職ニ關係アルコトナシ

第七十四條　判事身體若ハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルニ至リタルトキハ司法大臣ハ控訴院又ハ大審院ノ總會ノ決議ニ依リ之ニ退職ヲ命スルコトヲ得

第七十五條　法律ヲ以テ裁判所ノ組織ヲ變更シ又ハ之ヲ廢シタル場合ニ於テ其ノ判事ヲ補スヘキ闕位ナキトキハ司法大臣ハ之ニ俸給ノ半額ヲ給シテ闕位ヲ待タシムルノ權ヲ有ス

第七十六條　判事ノ官等俸給及進級ニ關ル規程ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第七十七條　判事ハ退職シタルトキハ恩給法ニ依リ恩給ヲ受ク

第七十八條　判事ノ俸給ハ判事ニ對シ懲戒取調又ハ刑事訴追ヲ始メタルカ故ニ停職シタルニ拘ラス引續キ之ヲ給ス

第三章　檢事

第七十九條　檢事ハ勅任又ハ奏任トス

第七十六條及第七十七條ハ檢事ニモ亦之ヲ適用ス

檢事總長及檢事長ノ職ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任檢事ノ中ヨリ之ヲ補ス其ノ他ノ檢事ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

第八十條　檢事ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其ノ意ニ反シテ之ヲ免職スルコトナシ

第八十一條　檢事ハ如何ナル方法ヲ以テスルモ判事ノ裁判事務ニ干渉シ又ハ裁判事務ヲ取扱フコトヲ得ス

第八十二條　檢事ハ其ノ上官ノ命令ニ從フ

第八十三條　檢事總長檢事長及檢事正ハ其ノ各管轄區域内ノ裁判所ノ檢事ノ職務ノ範圍内ニ在ル事務ヲ自ラ取扱フノ權ヲ有ス

檢事總長檢事長及檢事正ハ其ノ管轄區域内ニ於テ或ル檢事ノ取扱フヘキ事務ヲ他ノ檢事ニ移スノ權ヲ有ス

第八十四條　司法警察官ハ檢事ノ職務上其ノ檢事局管轄區域内ニ於テ發シタル命令及其ノ檢事ノ上官ノ發シタル命令ニ從フ

司法省又ハ檢事局及内務省又ハ地方官廳ハ協議シテ警察官中各裁判所ノ管轄區域内ニ於テ司法警察官トシテ勤務シ前項ノ命令ヲ受ケ及之ヲ執行スル者ヲ定ム

第四章　裁判所書記

第八十五條　裁判所ニ第八條ニ從ヒ相應ナル員數ノ書記ヲ置ク

區裁判所ノ各判事及合議裁判所ノ各部ノ爲少クトモ一人ノ書記ヲ置ク

第八十六條　地方裁判所ノ書記課ニ監督書記ヲ置ク控訴院及大審院ノ書記課ニ書記長ヲ置ク

區裁判所及檢事局ノ書記課ニ二人以上ノ書記ヲ置キタルトキハ其ノ一人ヲ監督書記トス

監督書記及書記長ハ各〻其ノ上官ノ命令ニ服從シテ書記課ノ事務ヲ指揮監督ス

第八十七條　書記其ノ職務ノ範圍内ニ於テ取扱ヒタル事ハ既ニ定マリタル事務分配上其ノ事他ノ書記ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其ノ效力ヲ失フコトナシ

第八十八條　書記ハ司法大臣之ヲ任シ及之ヲ補ス

書記長ハ奏任トス

書記長ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

第八十九條　書記ニ任セラルヽニハ勅令ノ定ムル所ニ依リ試驗ヲ經ルコトヲ要ス

志願者前項ノ試驗ヲ受ケ得ルニ必要ナル資格竝ニ此ノ試驗及試驗ヲ經タル後爲スヘキ修習ニ關ル細則ハ裁判所書記登用試驗規則中ニ司法大臣之ヲ定ム

第九十條　書記ニ任セラレタル者闕位ナキ間ハ豫備書記ニ補ス

豫備書記ハ書記トシテ臨時勤務ヲ命セラルヽコトヲ得

第九十一條　書記ハ其ノ上官ノ命令ニ從フ

裁判所ノ開廷ニ於テハ裁判長ノ命令ニ從ヒ又判事一人ナルトキハ其ノ判事ノ命令ニ從フ

書記ハ檢事局ニ勤務スルトキ又ハ特別ノ事務ニ付判事若ハ檢事ニ附屬シタルトキモ亦其ノ檢事局又ハ判事若ハ檢事ノ命令ニ從フ

前二項ノ命令ニシテ口述ノ書取ニ關ルカ又ハ書類記錄ノ調製若ハ變更ニ關ル場

合ニ於テ其ノ調製若ハ變更ヲ正當ナラスト認ムルトキ書記ハ自己ノ意見ヲ記シテ之ニ添フルコトヲ得

前四項ニ掲ケタルモノヲ除ク外書記ノ職務及其ノ事務取扱方法ハ書記ニ關ル規則中ニ司法大臣之ヲ定ム

第九十二條　合議裁判所長又ハ區裁判所ノ判事若ハ監督判事ハ其ノ裁判所ニ於テ修習中ノ試補ニ書記ノ事務ヲ臨時取扱ハシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ職務上署名ヲ要スルトキハ特別ノ許可ヲ得テ署名スル旨ヲ記ス

第九十三條　豫備書記ハ事務ノ取扱ニ於テハ書記ニ同シ但シ書記規則中ニ制限ヲ設ケタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第五章　執達吏

第九十四條　各區裁判所ニ第九條ニ從ヒ相應ナル員數ノ執達吏ヲ置ク

第九十五條　執達吏ハ司法大臣之ヲ任シ及之ヲ補ス司法大臣ハ控訴院長ニ其ノ管轄區域內ノ裁判所ノ執達吏ヲ任シ及補スルノ權ヲ委任スルコトヲ得

執達吏ニ任セラルヽニ必要ナル資格並ニ試驗ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第九十六條　執達吏ハ手數料ヲ受ク其ノ手數料一定ノ額ニ達セサルトキ補助金ヲ受ク

第九十七條　執達吏ハ其ノ所屬區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所管轄區域內ノ何レノ場所ニ於テモ其ノ職務ヲ行フ

第九十八條　裁判所ヨリ發スル文書ニシテ送達ヲ要スルモノハ執達吏ヲ以テ之ヲ送達ス但シ書記ヨリ直接ニ若ハ郵便ヲ以テ送達スルコトヲ法律ノ許ス場合ハ此ノ限ニ在ラス

執達吏ハ刑事ニ付警察官ヲ以テ執行ヲ爲サヽル場合ニ限リ裁判所ノ裁判ヲ執行ス

前二項ニ掲ケタルモノヲ除ク外執達吏ノ權限ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第九十九條　執達吏ハ其ノ職務ヲ適實ニ行フ爲保證金ヲ出スコトヲ要ス

執達吏ノ職務細則並ニ保證金ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第百條　執達吏ハ其ノ所屬裁判所ノ上官ノ命ヲ受ケタル書記及其ノ裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ノ上官ノ命ヲ受ケタル書記及其ノ書記ノ上官ノ命令ニ從フ

第六章　廷丁

第百一條　廷丁ハ大審院控訴院及地方裁判所ニ於テハ裁判所長區裁判所ニ於テハ地方裁判所長之ヲ雇ヒ及其ノ雇ヲ解ク

第百二條　廷丁ハ開廷ニ出頭セシメ及司法大臣ノ發シタル一般ノ規則中ニ定メタル事務ヲ取扱ハシム

區裁判所ハ執達吏ヲ用ヰルコト能ハサルトキハ其ノ裁判所所在地ニ於テ書類ヲ送達スル爲廷丁ヲ用ヰルコトヲ得

第三編　司法事務ノ取扱

第一章　開廷

第百三條　開廷ハ裁判所又ハ支部ニ於テ之ヲ爲ス

司法大臣ニ於テ事情ニ因リ必要ナリト認ムルトキハ區裁判所ヲシテ其ノ管轄區域内ノ一定ノ場所ニ於テ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第百四條　訴訟審問ノ上席及指揮ハ合議裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シタル裁判長ニ屬シ區裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シタル判事ニ屬ス

裁判長ニ屬スル權ハ裁判上一人ニテ執務スル判事ニモ亦屬ス

第百五條　裁判所ニ於テ對審ノ公開ヲ停ムルノ決議ヲ爲シタルトキハ其ノ決議ハ其ノ理由ト共ニ公衆ヲ退カシムル前之ヲ言渡ス此ノ場合ニ於テ裁判所ノ判決ヲ言渡ストキハ再ヒ公衆ヲ入廷セシムヘシ

第百六條　裁判長ハ公開ヲ停メタルトキモ入廷ノ特許ヲ與フルコトヲ至當ト認ムル者ヲ入廷セシムルノ權ヲ有ス

第百七條　裁判長ハ婦女兒童及相當ナル衣服ヲ著セサル者ヲ法廷ヨリ退カシムルコトヲ得其ノ理由ハ之ヲ訴訟ノ記錄ニ記入ス

第百八條　開廷中秩序ノ維持ハ裁判長ニ屬ス

第百九條　裁判長ハ審問ヲ妨クル者又ハ不當ノ行狀ヲ爲ス者ヲ法廷ヨリ退カシムルノ權ヲ有ス

前項ニ揭ケタル違犯者ノ行狀ニ因リ之ヲ勾引シ閉廷ノトキマテ之ヲ勾留スルノ

必要アリト認ムルトキ裁判長ハ之ヲ命令スルノ權ヲ有ス閉廷ノトキ裁判所ハ之ヲ釋放スルコトヲ命シ又ハ五圓以下ノ罰金若ハ五日以内ノ拘留ニ處スルコトヲ得

此ノ處罰ニ對シテハ上告ヲ許シ控訴ヲ許サス且其ノ所爲ノ輕罪若ハ重罪ニ該ルヘキモノナルトキハ之ニ對シテ刑事訴追ヲ爲スコトヲ得

第百十條　前條ノ規程ハ左ノ變更ヲ以テ當事者證人及鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス

第一　裁判所ハ閉廷ヲ待タスシテ本條ノ違犯者ヲ即時ニ罰スルコトヲ得

第二　違犯者原告ナルトキハ裁判所ハ處罰ノ上仍本人宥恕ヲ請フカ又ハ恭順ヲ表シテ不敬ノ罪ヲ謝スルマテ其ノ審問ヲ中止スルコトヲ得

第百十一條　裁判長ハ不當ノ言語ヲ用ヰル辯護士ニ對シ同事件ニ付引續キ陳述スルノ權ヲ行フコトヲ禁スルコトヲ得其ノ禁止ハ此ノ行狀ニ付懲戒上ノ訴追ヲ爲スコトヲ妨ケス

第百十二條　裁判所ノ開廷中秩序ヲ維持スル爲第百九條第百十條及第百十一條ヲ以テ與ヘタル權ハ豫審判事又ハ受命判事又ハ法律ニ從ヒ其ノ職務ヲ行フ試補モ亦之ヲ行フコトヲ得

此ノ場合ニ於テノ異議ハ二十四時以内ニ其ノ判事又ハ試補ニ之ヲ申出ルコトヲ得

豫審判事又ハ其ノ命ヲ受ケタル試補ノ命令ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ判事ノ屬スル裁判所ノ刑事部若ハ刑事支部ニ於テ前項ノ異議ヲ裁判ス受命判事又ハ其ノ命ヲ受ケタル試補ノ命令ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ判事ニ命シタル裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

第百十三條　第百九條第百十條第百十一條及第百十二條ヲ以テ與ヘタル權ヲ行ヒタルトキハ訴訟ノ記錄ニ之ヲ記入シ及其ノ理由ヲ記ス

前項ノ場合ニ於テ其ノ所爲ノ重罪若ハ輕罪ニ該ルヘキモノナルカ又ハ懲戒上罰スヘキモノナルトキハ詳細ニ之ヲ記入シ裁判長ハ其ノ事件ヲ更ニ處分スルノ權アル官廳ニ報告ヲ爲ス

第百十四條　判事檢事及裁判所書記ハ公開シタル法廷ニ於テハ一定ノ制服ヲ著ス

前項ノ開廷ニ於テ審問ニ參與スル辯護士モ亦一定ノ職服ヲ著スルコトヲ要ス

第二章　裁判所ノ用語

第百十五條　裁判所ニ於テハ日本語ヲ用ウ

當事者證人又ハ鑑定人ノ中日本語ニ通セサル者アルトキハ訴訟法又ハ特別法ニ通事ヲ用ヰルコトヲ要スル場合ニ於テ之ヲ用ウ

第百十六條　通事ノ任命及使用竝ニ訴訟手續上其ノ行フヘキ職務ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第百十七條　通事ノ得難キ場合ニ於テ書記其ノ言語ニ通スルトキハ裁判長ノ承諾ヲ得テ通事ニ用ヰラル丶コトヲ得

第百十八條　外國人ノ當事者タル訴訟ニ關係ヲ有スル者及其ノ訴訟ノ審問ニ參與スル官吏ノ或ル外國語ニ通スル場合ニ於テ裁判長便利ト認ムルトキハ其ノ外國語ヲ以テ口頭審問ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ審問ノ公正記錄ハ日本語ヲ以テ之ヲ作ル

第三章　裁判ノ評議及言渡

第百十九條　合議裁判所ノ裁判ハ此ノ法律ニ從ヒ定數ノ判事之ヲ評議シ及之ヲ言渡ス

第百二十條　四日以上引續クヘキ見込アル刑事ノ審問ニ於テ裁判所長ハ補充判事一人ヲ命シ之ニ立會ハシムルコトヲ得此ノ補充判事ハ其ノ審問中或ル判事ノ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ引續キ參與スルコトヲ得サル場合ニ於テ之ニ代リ審問及裁判ヲ完結スルノ權ヲ有ス

第百二十一條　判事ノ評議ハ之ヲ公行セス但シ豫備判事及試補ノ傍聽ヲ許スコトヲ得

判事ノ評議ハ其ノ裁判長之ヲ開キ且之ヲ整理ス其ノ評議ノ顚末竝ニ各判事ノ意見及多少ノ數ニ付テハ嚴ニ祕密ヲ守ルコトヲ要ス

第百二十二條　評議ノ際各判事意見ヲ述フルノ順序ハ官等ノ最モ低キ者ヲ始トシ裁判長ヲ終トス官等同キトキハ年少ノ者ヲ始トシ受命ノ事件ニ付テハ受命判事ヲ始トス

第百二十三條　裁判ハ過半數ノ意見ニ依ル

金額ニ付判事ノ意見三說以上ニ分レ其ノ說各〻過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ最多額ノ意見ヨリ順次寡額ニ合算ス

刑事ニ付其ノ意見三說以上ニ分レ各〻過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ被告人ニ不利ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス

第百二十四條　判事ハ裁判スヘキ問題ニ付自己ノ意見ヲ表スルコトヲ拒ムコトヲ得ス

第四章　裁判所及檢事局ノ事務章程

第百二十五條　裁判所及檢事局ノ標準ト爲スヘキ規則ハ司法大臣之ヲ定ム

控訴院長及檢事長ハ前項ノ規則ニ依リ各自管轄區域內ノ裁判所及檢事局ニ對シテ事務ノ一般ノ取扱ニ關リ成ルヘク統一ヲ旨トシ殊ニ裁判所及檢事局ノ開廳時間及開廷ノ時日ニ付訓令ヲ發ス

大審院ハ自ラ其ノ事務章程ヲ定ム但シ之ヲ實施スル前司法大臣ノ認可ヲ受ク

第五章　司法年度及休暇

第百二十六條　司法年度ハ一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ハル

第百二十七條　（四十四年法律第七十一號ヲ以テ削除）

第百二十八條　（同上）

第百二十九條　（同上）

第百三十條　（同上）

第六章　法律上ノ共助

第百三十一條　裁判所ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依リ互ニ法律上ノ補助ヲ爲ス

法律上ノ補助ハ別ニ法律ニ定メタル場合ノ外ハ所要ノ事務ヲ取扱フヘキ地ノ區裁判所ニ於テ之ヲ爲ス

第百三十二條　檢事局モ亦各自ノ管轄區域內ニ於テ取扱フヘキ事務ニ付互ニ法律上ノ補助ヲ爲ス

第百三十三條　裁判所書記課モ亦其ノ權内ノ事件又ハ其ノ配下ノ執達吏ノ權内ノ事件ニ付互ニ法律上ノ補助ヲ爲ス

第四編　司法行政ノ職務及監督權

第百三十四條　合議裁判所長區裁判所ノ判事若ハ監督判事檢事總長檢事長檢事正ハ司法大臣ノ由テ以テ司法行政ノ職務ヲ行フノ官吏トス

第百三十五條　司法行政監督權ノ施行ハ左ノ規程ニ依ル

第一　司法大臣ハ各裁判所及各檢事局ヲ監督ス

第二　大審院長ハ大審院ヲ監督ス

第三　控訴院長ハ其ノ控訴院及其ノ管轄區域内ノ下級裁判所ヲ監督ス

第四　地方裁判所長ハ其ノ裁判所若ハ其ノ支部及其ノ管轄區域内ノ區裁判所ヲ監督ス

第五　區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ其ノ裁判所所屬ノ書記及執達吏ヲ監督ス

第六　檢事總長ハ其ノ檢事局及下級檢事局ヲ監督ス

第七　檢事長ハ其ノ檢事局及其ノ局ノ附置セラレタル控訴院管轄區域内ノ檢事局ヲ監督ス

第八　檢事正ハ其ノ檢事局及其ノ局ノ附置セラレタル地方裁判所管轄區域内ノ檢事局ヲ監督ス

第百三十六條　前條ニ掲ケタル監督權ハ左ノ事項ヲ包含ス

第一　官吏不適當又ハ不充分ニ取扱ヒタル事務ニ付其ノ注意ヲ促シ並ニ適當ニ其ノ事務ヲ取扱フコトヲ之ニ訓令スル事

第二　官吏ノ職務上ト否トニ拘ラス其ノ地位ニ不相應ナル行状ニ付之ニ諭告

スル事

但シ此ノ諭告ヲ爲ス前其ノ官吏ヲシテ辯明ヲ爲スコトヲ得セシムヘシ

第百三十七條　第十八條及第八十四條ニ揭ケタル官吏ハ第百三十五條ニ依リ行フヘキ監督ヲ受クルノ官吏中ニ之ヲ包含ス

第百三十八條　裁判所若ハ檢事局ノ官吏ニシテ適當ニ其ノ職務ヲ行ハサル者又ハ其ノ行狀其ノ地位ニ不相應ナル者ニ付第百三十六條ヲ適用スルコト能ハサルトキハ懲戒法ニ從ヒ之ヲ訴追ス

第百三十九條　前數條ニ揭ケタル司法行政ノ職務及監督權ハ判事若ハ檢事其ノ官吏タルノ資格又ハ其ノ他ノ資格ヲ以テ爲シタル事ニ對シテ起リタル請求ニ付其ノ請求ヲ滿足セシムル爲之ヲ執行スルコトヲ得ス

第百四十條　司法事務取扱ノ方法ニ對スル抗告殊ニ或ル事務ノ取扱方ニ對シ又ハ取扱ノ延滯若ハ拒絕ニ對スル抗告ハ此ノ編ニ揭ケタル司法行政ノ職務及監督權ニ依リ之ヲ處分ス

第百四十一條　裁判所及檢事局ハ司法大臣又ハ監督權アル判事若ハ檢事ノ要求アルトキハ法律上ノ事項又ハ司法行政ニ關ル事項ニ付意見ヲ述フ

第百四十二條　司法官廳ニ對シテ起リタル民事ノ訴訟ニ於テハ其ノ訴訟ヲ受ケタル裁判所ノ檢事局ハ司法官廳ヲ代表ス

第百四十三條　此ノ編ニ揭ケタル前各條ノ規程ハ裁判上執務スル判事ノ裁判權ニ影響ヲ及ホシ又ハ之ヲ制限スルコトナシ

附　則

第百四十四條　此ノ法律ノ施行ニ關ル規程竝ニ從來ノ法律ニシテ此ノ法律ニ牴觸スト雖モ當分ノ內仍ホ效力ヲ有セシムルモノハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

附　則（四十一年法律第三十號）

本法ハ刑法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前ニ提起シタル訴訟ハ本法ニ依リ他ノ裁判所ノ權限ニ屬スヘキモノト雖モ受訴裁判所之ヲ裁判スヘシ

本法施行後重禁錮又ハ輕禁錮ニ處スヘキ罪ノ裁判權ニ付テハ重禁錮ヲ懲役ト看做シ輕禁錮ヲ禁錮ト看做ス

●裁判所構成法施行條例（明治二十三年三月十九日法律第二十二號）

朕裁判所構成法施行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

裁判所構成法施行條例

第一條　從來ノ治安裁判所ハ裁判所構成法ニ定メタル區裁判所トシ從來ノ始審裁判所ハ裁判所構成法ニ定メタル地方裁判所トシ又從來ノ控訴院大審院ハ裁判所構成法ニ定メタル控訴院大審院トス

第二條　始審裁判所從來ノ檢事局ハ裁判所構成法ニ定メタル地方裁判所ノ檢事局トス控訴院大審院ノ檢事局モ亦同シ

第三條　區裁判所ノ管轄區域ヲ爲ス町村ノ變更ハ之ヲ區裁判所管轄區域ニ及ホスモノトス

第四條　裁判所構成法實施前他ノ裁判所第一審トシテ受理シタル民事訴訟及刑事訴訟ニシテ同法ニ依リ區裁判所ノ管轄ニ屬シタルモノハ現在ノ儘相當ノ區裁判所ニ移ルモノトス既ニ爲シタル裁判ハ區裁判所之ヲ爲シタルモノト看做ス

第五條　裁判所構成法ニ依リ地方裁判所ノ第二審ニ屬スヘキモ既ニ控訴院ニ於テ受理シタル事件ハ控訴院之ヲ裁判スヘシ又控訴院ノ管轄ニ屬スヘキモ既ニ大審院ニ於テ受理シタル民事刑事ノ上告ハ大審院之ヲ裁判スヘシ

第六條　裁判所構成法實施前重罪裁判所ニ於テ受理シタル刑事訴訟ハ現在ノ儘相當ノ地方裁判所ニ移ルモノトス既ニ爲シタル裁判ハ地方裁判所之ヲ爲シタルモ

ノト看做ス

第七條　裁判所構成法實施前始審裁判所ニ於テ受理シタル郡長區長戶長又ハ市長町長村長ニ對スル民事訴訟ハ同法ニ依リ區裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノト雖其ノ地方裁判所之ヲ裁判シ控訴院ニ於テ受理シタル官廳ニ對スル民事訴訟ハ其ノ控訴院之ヲ裁判スヘシ

第八條　裁判所構成法實施前高等法院ニ於テ受理シタル刑事訴訟ハ現在ノ儘相當ノ裁判所ニ移ルモノトス高等法院ニ於テ裁判スヘキ事件ヲ通常裁判所ニ於テ受理シタルモノモ亦同シ

第九條　明治十八年第三十一號布告違警罪即決例ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ受クルコトナシ

第十條　明治十八年第十二號布告普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交涉ノ件處分法ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ受クルコトナシ

第十一條　明治二十一年勅令第六十四號ハ仍效力ヲ有ス

區裁判所出張所ニ於テ判事差支アルトキハ裁判所書記ヲシテ登記事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

北海道及島嶼ニシテ區裁判所遠隔ノ地方ニ於テ司法大臣ハ郡長町長又ハ村長ニ委任シテ登記事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第十二條　東京地方裁判所管內小笠原島及伊豆七島ニ於テ民事刑事ノ訴訟ニシテ區裁判所ノ裁判權ニ屬スルモノ及非訟事件ハ裁判所設置マテ島吏之ヲ取扱フ但シ刑事訴訟ノ手續ハ便宜之ヲ取扱フコトヲ得

第十三條　沖繩縣ニ於テ民事刑事ノ訴訟及非訟事件ニシテ區裁判所及地方裁判所ノ裁判權ニ屬スルモノハ裁判所設置マテ同縣官吏之ヲ取扱フ但シ控訴院ノ裁判權ニ屬スルモノハ長崎控訴院ノ管轄トス

第十四條　（四十二年法律第三十一號ヲ以テ削除）

第十五條　明治二十一年勅令第七十一號清國竝ニ朝鮮國駐在領事裁判規則ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ受クルコトナシ

第十六條　裁判所構成法實施ノ際在職ノ裁判官檢察官ハ同法第二編第一章ノ要件ヲ必要トセス

第十七條　裁判所構成法實施ノ際在職ノ書記ハ同法第二編第四章第八十九條ノ要件ヲ必要トセス

第十八條　裁判所構成法實施後三年間ハ司法大臣ハ試補實地修習ノ時間ヲ一年六箇月マテニ減縮スルコトヲ得

明治十七年太政官達第百二號判事登用規則及明治二十年勅令第三十七號文官試驗試補及見習規則ニ依リ試補ト爲リタル者ハ第二回試驗ヲ要セスシテ之ヲ判事又ハ檢事ニ任スルコトヲ得

第十九條　裁判所構成法實施後一年間ハ司法大臣ハ同法第二編第二章第六十九條及第七十條ノ規程ニ拘ラス補職ヲ爲スコトヲ得

第二十條　三年以上裁判官又ハ檢察官ノ職ヲ奉シタル者又ハ三年以上舊參事院議官又ハ議官補ノ職ヲ奉シタル者又ハ三年以上法制局參事官ノ職ヲ奉シタル者又ハ三年以上司法省高等官（會計局ノ高等官ヲ除ク）ノ職ヲ奉シタル者ハ裁判所構成法實施後一年間ハ之ヲ判事又ハ檢事ニ任スルコトヲ得

第二十一條　裁判所構成法第二編第二章第七十四條及第七十五條ハ檢事ニモ亦之ヲ適用ス

◉裁判所位置及管轄區域　（明治二十三年八月十二日法律第六十二號）

朕裁判所位置及管轄區域改定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ裁判所構成法實施ノ日ヨリ效力ヲ有ス

裁判所位置及管轄區域別表ノ通改定ス但新置裁判所開廳ノ期日ハ司法大臣之ヲ定ム

（裁判所位置及管轄區域表略ス）

◉區裁判所出張所設置　（明治二十一年九月十七日勅令第六十四號）

朕治安裁判所出張所設置ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

治安裁判所出張所ヲ置キ登記事務並期日ヲ定メ裁判事務ヲ取扱ハシム其位置及ヒ管轄區域ハ司法大臣之ヲ定ム

◉區裁判所及出張所登記管轄區域

（明治二十六年六月十三日司法省令第十號）

各地方裁判所管内ニ區裁判所出張所竝登記所ヲ增設シ明治二十三年八月司法省令第四號及ヒ明治十九年十二月司法省令甲第四號登記管轄區域別册ノ通改定ス

但新設出張所開廳迄其管内登記事務ハ從前ノ管轄廳ニ於テ之ヲ取扱ハシム

（別册略ス）

●地方裁判所支部及管轄表（明治二十三年八月十五日司法省令第三號）

明治二十三年二月法律第六號裁判所構成法第三十一條ニ依リ地方裁判所支部及其管轄左表甲乙號ノ通相定メ甲號支部ニ於テハ重罪公判及民事第二審ヲ除ク外地方裁判所ノ裁判權ニ屬スル事務乙號支部ニ於テハ豫審ヲ要スルモノヲ除ク外地方裁判所ノ裁判權ニ屬スル刑事第一審ノ事務ヲ取扱ハシム

但本令ハ明治二十三年十一月一日ヨリ實施ス

（甲號、乙號表略ス）

○司法省令 明治二十四年九月十六日第九號

地方裁判所甲號支部ニ於テハ自今刑事第二審ノ事務取扱ヲ廢止ス

●判事檢事官等俸給令（明治三十二年四月十八日勅令第百五十三號）

三十五年勅令第九十三號三十八年同第百十七號第二百三號四十年同第七十九號四十一年同第百三十二號四十二年同第九十號四十三年同第百五十二號ヲ以テ改正

朕判事檢事官等俸給令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

判事檢事官等俸給令

第一條　（削除）

第二條　判事檢事ノ各職ニ付人員ヲ定ムルコト左ノ如シ

大審院ハ院長一人部長三人判事二十五人ヲ以テ定員トス

大審院檢事局ハ檢事總長一人檢事七人ヲ以テ定員トス

控訴院ハ院長七人部長二十一人判事百十人ヲ以テ定員トス

判事檢事官等俸給令

控訴院檢事局ハ檢事長七人檢事二十九人ヲ以テ定員トス
地方裁判所ハ所長五十八人部長七十八人判事二百七十八人ヲ以テ定員トス
地方裁判所檢事局ハ檢事正五十八人檢事八十八人ヲ以テ定員トス
區裁判所ハ判事五百六十八人ヲ以テ定員トス
區裁判所檢事局ハ檢事二百八人ヲ以テ定員トス
第三條 判事檢事ノ各職ニ付其ノ俸給ヲ定ムルコト左ノ如シ

大審院
長 勅任一級俸
部長 勅任三級俸
判事 奏任三級俸乃至勅任四級俸

大審院檢事局
檢事總長 勅任二級俸
檢事 奏任三級俸乃至勅任三級俸

控訴院
長 東京大阪 勅任二級俸
其ノ他 勅任三級俸
部長 奏任四級俸乃至奏任一級俸
判事 奏任七級俸乃至奏任四級俸

控訴院檢事局
檢事長 東京大阪 勅任三級俸又ハ勅任二級俸
其ノ他 勅任四級俸又ハ勅任三級俸
檢事 奏任七級俸乃至奏任一級俸

地方裁判所
長 東京大阪 奏任一級俸乃至勅任四級俸
京都、横濱、神戶、長崎、函館、新潟、仙臺、名古屋、廣島、熊本、福岡、札幌、樺太 奏任三級俸乃至勅任五級俸
其ノ他 奏任四級俸乃至奏任一級俸

部長　奏任七級俸乃至奏任三級俸

判事　豫審判事奏任十級俸乃至奏任四級俸

其ノ他奏任十級俸乃至奏任六級俸

地方裁判所檢事局

檢事正　東京大阪奏任一級俸乃至勅任四級俸

京都、横濱、神戸、長崎、函館、新潟、仙臺、名古屋、廣島、熊本、福岡、札幌、樺太　奏任三級俸乃至勅任五級俸

其ノ他奏任四級俸乃至奏任一級俸

檢事　奏任十級俸乃至奏任三級俸

區裁判所

判事　司法大臣ノ指定シタル區裁判所ノ監督判事奏任八級俸乃至奏任四級俸

其ノ他奏任十級俸乃至奏任六級俸

區裁判所檢事局

檢事　司法大臣ノ指定シタル區裁判所ノ上席檢事奏任八級俸乃至奏任四級俸

其ノ他奏任十級俸乃至奏任六級俸

東京及大阪控訴院ノ部長及檢事ハ各一人ヲ限リ勅任ト爲シ五級俸ヲ給スルコトヲ得

東京及大阪地方裁判所ノ部長及檢事ニハ各一人ヲ限リ奏任二級俸ヲ給スルコトヲ得

東京及大阪地方裁判所ノ豫審判事ニハ各一人ヲ限リ奏任三級俸ヲ給スルコトヲ得

東京及大阪區裁判所ノ監督判事及上席檢事ニハ奏任二級俸以下ヲ給スルコトヲ得

司法大臣ノ指定シタル地方裁判所ノ部ノ豫審判事ニハ奏任五級俸ヲ給スルコトヲ得

勅任五級俸ヲ受クヘキ勅任地方裁判所長及檢事正又ハ區裁判所監督判事及上席檢事ニシテ其ノ職ノ最上級俸ヲ受ケ五年ヲ超エ功績アル者ハ各一級ヲ進ムルコトヲ得

第四條　（削除）

第五條　（削除）

第六條　（削除）

第七條　豫備判事及豫備檢事ニハ七百圓以内ノ年俸ヲ給ス

第八條　司法官試補ハ奏任ノ待遇トス

司法官試補ニハ六百圓以内ノ年俸ヲ給スルコトヲ得

第九條　判事檢事各職ノ進級ハ拔擢ヲ以テ之ヲ行フ

第十條　判事檢事ノ裁判所内ニ於ケル席次ハ官等ニ依リ官等同シキ者ハ俸給ノ多寡ニ依リ俸給同シキ者ハ俸給下賜辭令ノ日附ニ依ル

附　則

第十一條　本令施行ノ際別ニ辭令ヲ交付セサル者ハ現ニ受クル俸給額相當ノ俸給ヲ給セラルルモノトス

第十二條　明治二十七年二月十四日勅令第十七號判事檢事官等俸給令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

附　則（明治四十三年勅令第百五十二號）

本令中第二條改正規定ハ明治四十三年三月三十一日ヨリ其ノ他ハ明治四十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ第四條ノ規定ニ依リ加俸ヲ受クル者別ニ辭令書ヲ交付セラレサルトキハ其ノ加俸ノ額ハ從前ノ額ニ依ル

第四條ニ揭ケタル判事又ハ檢事其ノ各職ニ付最上級俸ヲ受ケタル年數ハ第三條第七項ノ年數ニ通算ス

判事檢事ノ各職ニ付定メタル俸給ノ最下限ハ當分ノ内其ノ規定ニ依ラサルコトヲ得但シ高等官官等俸給令所定ノ最低俸給額ヲ下ルコトヲ得ス

●判事檢事官等俸給令ニ依リ指定ノ區裁判所

（明治四十二年五月二十五日　司法省令第九號）

判事檢事官等俸給令第三條第一項ニ依リ左ノ區裁判所ヲ指定ス

東京區裁判所　横濱區裁判所　土浦區裁判所
栃木區裁判所　熊谷區裁判所　高崎區裁判所

濱松區裁判所	松本區裁判所	長岡區裁判所
高田（新潟地方管內）區裁判所	京都區裁判所	宮津區裁判所
大阪區裁判所	神戶區裁判所	姬路區裁判所
名古屋區裁判所	岡崎區裁判所	高岡區裁判所
廣島區裁判所	吳區裁判所	尾道區裁判所
赤間關區裁判所	津山區裁判所	米子區裁判所
長崎區裁判所	佐世保區裁判所	福岡（福岡地方管內）區裁判所
久留米區裁判所	小倉區裁判所	中津區裁判所
熊本區裁判所	仙臺區裁判所	古川區裁判所
若松區裁判所	磐井區裁判所	橫手區裁判所
弘前區裁判所	札幌區裁判所	旭川區裁判所
小樽區裁判所	ウラジミロフカ區裁判所	マウカ區裁判所

●判事檢事官等俸給令ニ依リ指定ノ地方裁判所支部

（明治四十二年五月二十六日司法省令第十一號）

判事檢事官等俸給令第三條第六項ニ依リ左ノ地方裁判所支部ヲ指定ス

水戶地方裁判所土浦支部	宇都宮地方裁判所栃木支部
浦和地方裁判所熊谷支部	前橋地方裁判所高崎支部
靜岡地方裁判所濱松支部	長野地方裁判所松本支部
新潟地方裁判所長岡支部	新潟地方裁判所高田支部
京都地方裁判所宮津支部	神戶地方裁判所姬路支部
名古屋地方裁判所岡崎支部	富山地方裁判所高岡支部
廣島地方裁判所尾道支部	山口地方裁判所赤間關支部
岡山地方裁判所津山支部	鳥取地方裁判所米子支部
長崎地方裁判所佐世保支部	福岡地方裁判所久留米支部
福岡地方裁判所小倉支部	大分地方裁判所中津支部
仙臺地方裁判所古川支部	福島地方裁判所若松支部
盛岡地方裁判所磐井支部	秋田地方裁判所橫手支部
青森地方裁判所弘前支部	札幌地方裁判所小樽支部

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

●地方裁判所支部ノ判事檢事及區裁判所監督判事補職ノ件（明治二十四年八月二十二日 司法省訓令第五號）

裁判所 檢事局

地方裁判所支部ノ事務ヲ取扱フヘキ判事檢事及區裁判所監督判事補職等ノ件ニ付左ノ通リ相定ム

一 地方裁判所ノ支部ヲ置ク區裁判所ノ判事又ハ檢事ヲ地方裁判所判事又ハ檢事ニ兼補シタル處自今地方裁判所判事又ハ檢事ニ兼補スルヲ止メ區裁判所ノ判事又ハ檢事ハ當然地方裁判所支部ノ事務ヲ取扱フヘキモノトス

二 區裁判所監督判事モ亦補職スルヲ止メ自今特ニ之ヲ命スルモノトス

但シ現在ノ監督判事ハ別ニ辭令書ヲ用ヒス其區裁判所判事ニ補シ其廳ノ監督ヲ命シタルモノトス

●判事檢事登用試驗規則（明治二十四年五月十五日 司法省令第三號）

判事檢事登用試驗規則左ノ通相定ム

判事檢事登用試驗規則

判事檢事登用試驗規則

第一章　試驗委員

第一條　判事檢事登用試驗委員ハ委員長一名委員數名ヲ以テ之ヲ組織ス

第二條　判事檢事登用第一回試驗委員長及委員ハ司法省高等官及判事檢事中ヨリ試驗擧行毎ニ司法大臣之ヲ命ス但必要アルトキハ他ノ官廳高等官ニ試驗委員ヲ囑託スルコトアルヘシ（三十八年司法省令第三號四十四年同第十一號ヲ以テ本條改正）

判事檢事登用第二回試驗委員長ハ司法次官ヲ以テ之ニ充テ試驗委員ハ常任ヲ三名トシ司法省高等官及大審院控訴院ノ判事檢事中ヨリ司法大臣之ヲ命ス其他ノ委員ハ司法省高等官及大審院訴訟院ノ判事檢事中ヨリ臨時司法大臣之ヲ命ス

試驗委員附屬ノ書記ハ司法屬又ハ裁判所書記ノ內ヨリ司法大臣之ヲ命ス

第三條　判事檢事登用試驗委員長ハ委員ヲ監督シ試驗ニ關スル一切ノ事務ヲ總理ス（三十八年司法省令第三號ヲ以テ本條改正）

試驗委員長ニ闕員又ハ事故アルトキハ上席ノ委員之ヲ代理ス

第四條　判事檢事登用試驗委員長及委員ニハ二百圓以內ノ手當ヲ給シ試驗委員附屬ノ書記ニハ三拾圓以內ノ手當ヲ給ス（二十九年司法省令第五十二號ヲ以テ改正）

第二章　受驗資格

第五條　判事檢事登用試驗ヲ受クルコトヲ得ル者ハ成年以上ノ男子ニシテ左ニ記載シタル者ニ限ル（三十八年司法省令第十三號ヲ以テ本條改正）

一　官立學校及專門學校令ニ依ル公立又ハ私立ノ學校（別科ヲ除ク）ニ於テ三學年以上法律學科ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

二　司法大臣ニ於テ指定シタル公立又ハ私立ノ學校ニ於テ三學年以上法律學科ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

三　司法大臣ニ於テ相當ト認メタル外國ノ大學校又ハ之ト同等ナル學校ニ於テ法律學科ヲ修メ卒業證書ヲ有スル者

前項第二號ハ明治四十年七月三十一日以後卒業スル者ニハ之ヲ適用セス

第六條　裁判所構成法第六十六條ニ該ル者ハ試驗ヲ受クルコトヲ得ス

第三章　第一回試驗

第七條　第一回試驗ハ司法省ニ於テ之ヲ行フ試驗ノ期日ハ試驗委員長之ヲ定メ官報ヲ以テ公告ス

第八條　試驗志願者ハ其志願書ニ左ノ證書ヲ添ヘ之ヲ試驗委員長ニ差出スヘシ（二十六年司法省令第十六號ヲ以テ改正）

一　履歷書

二　身分年齡及兵役ニ關スル證明書

三　第五條ニ定メタル要件ノ證明書

試驗志願者ハ試驗手數料トシテ金拾圓ヲ納ムヘシ但其手數料ハ登記印紙ヲ用ヰ之ヲ志願書ニ貼付スヘシ

手數料ハ志願書ヲ取下ケ又ハ試驗ヲ受ケサルトキト雖モ之ヲ還付セス

第八條ノ二　試驗ヲ分チテ豫備試驗及本試驗トシ尙身體檢査ヲ行フ（四十二年司法省令第十二號ヲ以テ改正）

第八條ノ三　豫備試驗ハ受驗者ノ本試驗ヲ受クルニ相當ナル普通ノ學識ヲ試驗スルヲ以テ目的トス（三十八年司法省令第十三號ヲ以テ追加）

第八條ノ四　豫備試驗ハ左ノ科目ニ付キ之ヲ施行ス（同上）

一　論文

二　外國語

外國語ハ英語、佛語及獨語ノ中ニ就キ一種ヲ選ハシム

第八條ノ五　試驗委員豫備試驗ノ答案ヲ調査シタル後本試驗ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ本試驗ノ爲メ志願者ヲ呼出スヘシ（同上）

第八條ノ六　豫備試驗ノ方法ハ試驗委員長之ヲ定ム（同上）

第九條　本試驗ハ受驗者ノ專門ノ學識ヲ試驗スルヲ以テ目的トシ筆記口述ノ二樣トス（同上ヲ以テ改正）

第十條　筆記試驗ハ憲法民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法行政法國際公法國際私法ノ各科目ニ就キ之ヲ施行ス（二十九年司法省令第五十二號ヲ以テ改正）

第十一條　試驗委員筆記答案ヲ調査シタル後口述試驗ヲ爲スニ足ルヘキモノト認メタルトキハ口述試驗及身體檢査ノ爲メ志願者ヲ呼出スヘシ（四十二年司法省

令第十二號ヲ以テ改正）

第十二條　口述試驗ハ民法商法刑法民事訴訟法刑事訴訟法ノ中少クトモ三科目ニ就キ之ヲ施行ス

第十三條　受驗者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試驗口述試驗ノ成績ニ對スル委員過半數ノ意見ニ從テ之ヲ決ス

及第落第ニ付テノ意見數相半スルトキハ落第ト看做スヘシ

身體檢査ニ合格セサル者ハ前二項ノ規定ニ拘ラス落第トス（四十二年司法省令第十二號ヲ以テ追加）

第十四條　志願者口述試驗又ハ身體檢査ニ闕席シタルトキハ試驗ハ成立タサルモノトス（同上ヲ以テ本條中追加）

第十五條　試驗委員長ハ及第者ノ氏名及其試驗ノ成績ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

第十六條　帝國大學法律科卒業生ニシテ司法官ノ任用ヲ望ム者ハ第八條ノ規程ヲ準用シ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第四章　實地修習

第十七條　試補ハ區裁判所及地方裁判所竝其檢事局ニ於テ一名若ハ數名ノ判事又ハ檢事ニ附屬シテ事務ヲ修習スヘシ

第十八條　修習事務直接ノ指揮監督ハ地方裁判所長之ヲ爲ス檢事ノ事務ヲ修習スルトキハ檢事正之ヲ爲ス

裁判所長若ハ檢事正ハ毎年末ニ試補ノ職務上及職務外ノ行狀竝執務ニ關スル成績ノ證明書ヲ作リ控訴院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

第十九條　試補ハ修習目錄ヲ作リ其取扱ヒタル事件ヲ記載スヘシ

此目錄ハ毎月直接指揮監督者ニ差出シ檢閲ヲ受クヘシ

第二十條　試補ノ疾病又ハ兵役履行ノ爲メ修習ヲ缺キタル日數一年六箇月間二箇月以內ハ修習日數ニ算入ス（四十二年司法省令第十二號ヲ以テ本條中改正）

賜暇其他ノ原因ニ由リ修習ヲ缺キタル日數一箇年間一箇月以內亦同シ

第一項第二項ノ場合併起スルトキハ通計シテ二箇月以內ニ非サレハ算入スルコトヲ得ス

第二十一條　試補ノ直接指揮監督者ハ試補職務上ノ義務ヲ怠リ又ハ職務上若ハ職務外ニ於テ其身分ニ適セサル行狀アルトキハ之ヲ諭告スヘシ此場合ニ於テハ指揮監督者ハ諭告ヲ爲シタルコトヲ試補ノ履歴ニ記入スヘシ

第二十二條　試補職務上若ハ職務外ノ行狀其職務ヲ執ルニ不適當ナルカ又ハ其修習ノ進歩不十分ニシテ第二回試驗ニ及第ノ見込ナキトキハ直接指揮監督者ハ控

號院長檢事長ヲ經由シテ之ヲ司法大臣ニ報告スヘシ

司法大臣前項ノ報告ヲ受ケタルトキハ試補ヲ免スルコトアルヘシ

第五章　第二回試驗

第二十三條　第二回試驗ハ司法省ニ於テ之ヲ行フ（三十八年司法省令第三號ヲ以テ本條改正）

試驗ノ期日ハ試驗委員長之ヲ定ム

第二十四條　試補第二回試驗ヲ受クルニハ直接指揮監督者ヲ經由シテ志願書ヲ司法大臣ニ差出スヘシ

志願書ニハ修習目錄ト陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコトヲ證明スル書面トヲ添フヘシ

第二十五條　司法大臣ハ第二回試驗ヲ受クヘキ試補ノ氏名ヲ試驗委員長ニ通知シ試驗ヲ行ハシム

第二十六條　第二回試驗ハ受驗者ノ實務ニ習熟シタルヤ否ヲ試驗スルヲ以テ主タル目的トシ筆記口述ノ二樣トス

第二十七條　試驗委員ハ試補ニ筆記試驗ノ爲メ二件以上ノ訴訟記錄ヲ付與スヘシ

第二十八條　受驗者ハ付與セラレタル訴訟記錄ニ就キ事實及理由ヲ詳示シタル判決案ヲ答案トシテ差出スヘシ（三十八年司法省令第三號ヲ以テ本條改正）

答案ハ試驗委員長ノ定メタル日時内ニ之ヲ差出スヘシ若シ之ニ違ヒタルトキハ試驗ハ成立タサルモノトス

第二十九條　口述試驗ノ方法ハ委員長之ヲ定ム（同上）

第三十條　試補第二回試驗ニ及第セサル場合ニ於テハ更ニ六箇月間修習ヲ爲シタル後試驗ヲ受クルコトヲ得（同上）

第三十一條　試補第二回試驗ノ成立タサル場合ニ於テハ司法大臣ノ相當ト認ムル時期ニ於テ更ニ試驗ヲ受クルコトヲ得（同上）

第三十二條　第一回試驗ニ關ル第十一條及第十三條乃至第十五條ノ規程ハ第二回試驗ニモ亦之ヲ適用ス

○司法省令第三號　明治四十二年四月七日　明治四十二年同四十三年ニ施行スヘキ